千葉県八千代市

高津新山遺跡Ⅲ

—昭和58年度確認調査の概要—

1984・3

八千代市教育委員会

序　　文

住宅と農業区域が混在する中で、昭和40年代後半より急激な開発の進む本市にあって、文化財の保護、保存は急務と言えます。それは開発の好悪に係わらず生活環境の変化を伴ない、今迄生活や自然の中で守られ、伝えられてきた伝承や文化が、次第に忘失・散逸されるなどがありえるからです。このため祖先から長い年月にわたって守り伝えられてきた、かけがえのない文化遺産（文化財）を不注意な行為によって失うことのないよう、私たちは努めていかなければなりません。ことに埋蔵文化財については、千葉県教育委員会の御指導のもと、事前協議制を確立するなど、その保存措置を事前に講じるための一助としてきました。

このような中で、今回報告する本書は文化財保存事業のうち埋蔵文化財緊急調査として、昭和56年度より国庫補助及び千葉県の補助を受けて実施している、高津新山遺跡の３年次目の確認調査の概要を記したものです。調査は宅地化の波が押し寄せる本市にあって、その傾向が顕著な地域のひとつである高津地区で、そういう行為に先立って、将来に保存策を講じる資料を得ることを目的としたものでした。

今年度の調査で高津新山遺跡の確認作業は終了しますが、先土器時代から中世に至るまで、長い年月にわたって人々が生活していたことがわかり、なかでも平安時代の「ムラ」の跡が中心であることがわかりました。先人たちが日々暮しの中で考え、作り、使った石器や土器が数多く出土し、住居の跡なども発見され、多くの成果を得ることができました。この貴重な成果は遺跡の保護を考えるうえで、役立てていきたいと考えています。

なお本書を作成するにあたり、この調査に御協力いただいた土地所有者の方々、炎天下で調査に参加された皆様に謝意を表する次第です。

また今回この報告書が刊行されるにあたり、多くの方々にこの資料が広く活用していただけるならば幸いに思います。

昭和59年３月

八千代市教育委員会

教育長　大熊章一

例　　言

1、本書は千葉県八千代市高津字堀込1738番地外の高津新山遺跡第Ⅲ次確認調査の概要をまとめたものである。

2、本遺跡の今回の調査は、準備を昭和58年6月より始め、発掘を昭和58年7月20日に開始し、昭和58年11月1日迄実施した。

3、本書の執筆は分担執筆とし、第1章1、第Ⅲ章1・2、第Ⅳ章、第Ⅴ章を朝比奈竹男が、第Ⅰ章2・3・4、第Ⅱ章、第Ⅲ章3を秋山利光が担当した。

4、本遺跡の出土遺物及び記録図面は八千代市教育委員会が所掌し、高津新山遺跡事務所に現在保管している。

5、調査にあたって地元の方々の御協力、御助言を賜わり、また器材等について八千代市サービスセンター、区画整理課より御協力を得た、記して謝辞としたい。

6、調査組織については以下の通りである。

調査主体　八千代市教育委員会
大熊章一（八千代市教育委員会教育長）

事務局　清水盛人（八千代市教育委員会社会教育課長）
小笠原和也（八千代市教育委員会社会教育課文化係長）
川上俊一（八千代市教育委員会社会教育課主事）

調査担当者　朝比奈竹男（八千代市教育委員会社会教育課主事）
秋山利光（八千代市教育委員会社会教育課主事）

調査員　木對和紀

調査補助員　小菅雄二・長谷川浩二・藤田篤・中村稔・山本剛・岩浪隆時・入江寛・蕨茂美
牧山泰敏・竹田正則・村山昌広・池田猛・新井広幸・滝田剛

調査参加者　岩井きみ子・岩井英子・岩井純子・岩井なか・石井きよ・樫山栄子・岩井美智枝・岩井波江・小川春子・小川正己・鈴木誠・野邑詔子・三藤浩章・鈴木あい
岩井とく・岩井勝子・岩井千恵

整理参加者　植田正子・荻原伊津子・勝又寿子・佐治節江・鈴木孝子・渕上妙子・大坪智子

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
第Ⅰ章　調査の概要と経過……1頁
1．調査の概要……1頁
2．発掘調査の方法……1頁
3．調査の経過……2頁
日誌抄……2頁
4．高津新山遺跡の層序……3頁
第Ⅱ章　遺　構……5頁
1．第05号住居址……5頁
2．第06号住居址……13頁
3．第01号土壙……16頁
第Ⅲ章　グリッド出土遺物……18頁
1．縄文時代の遺物……18頁
2．弥生時代の遺物……19頁
3．グリッド出土の土師器……19頁
第Ⅳ章　小　結……24頁
第Ⅴ章　発掘調査のまとめ……25頁
1．先土器時代……27頁
2．縄文時代……27頁
3．弥生時代……28頁
4．古墳時代……28頁
5．奈良・平安時代……28頁
6．中・近世について……31頁

挿図目次

第1図　高津新山遺跡の地形測量図及びグリッド配置図……付図
第2図　高津新山遺跡の土層図……4頁
第3図　第05号住居址実測図……7頁
第4図　第05号住居址カマド実測図……8頁
第5図　第05号住居址出土遺物(1)……8頁

第６図　第05号住居址出土遺物(2)……９頁
第７図　第05号住居址出土遺物(3)……10頁
第８図　第05号住居址出土遺物(4)……11頁
第９図　第06号住居址実測図……14頁
第10図　第06号住居址カマド実測図……15頁
第11図　第06号住居址出土遺物……15頁
第12図　第01号土壙実測図……17頁
第13図　第01号土壙出土遺物……17頁
第14図　縄文時代の遺物……19頁
第15図　弥生時代の遺物……21頁
第16図　グリッド出土の土師器(1)……21頁
第17図　グリッド出土の土師器(2)……22頁
第18図　縄文式土器グリッド出土状況図……26頁
第19図　土師器グリッド出土状況図……29頁
第20図　鉄滓グリッド出土状況図……32頁
第21図　中世以降の陶器グリッド出土状況図……33頁

図版目次

図版１　高津新山遺跡遠景・近景……36頁
図版２　発掘風景・土層……37頁
図版３　第05号住居址・第05号住居址発掘風景……38頁
図版４　第05号住居址土層・第05号住居址カマド……39頁
図版５　第05号住居址遺物出土状況・第05号住居址遺物(1)……40頁
図版６　第05号住居址遺物(2)……41頁
図版７　第05号住居址遺物(3)……42頁
図版８　第05号住居址遺物(4)……43頁
図版９　第05号住居址実測風景・第06号住居址……44頁
図版10　第06号住居址発掘風景・第06号住居址確認状況……45頁
図版11　第06号住居址カマド・第06号住居址遺物……46頁
図版12　第01号土壙・第01号土壙土層……47頁
図版13　第01号土壙確認状況・第01号土壙遺物……48頁
図版14　縄文時代の遺物……49頁
図版15　弥生時代の遺物・グリッド出土の土師器(1)……50頁
図版16　グリッド出土の土師器(2)……51頁

第Ⅰ章　調査の概要と経過

1．調査の概要（第1図）

昭和52年八千代市都市部より、無計画な宅地化をさけ、都市計画の一環としての区画整理事業を実施したい旨、市教育委員会へ連絡があり、文化財保護法第57条により千葉県教育委員会との3者で協議が重ねられた。その後、事業計画は進渉をみなかったものの、個人の宅地化が進行していた。このようななかで昭和55年に都市部より確認調査の実施依頼を受け、市教育委員会も本遺跡の範囲・性格を把握し、その保存策を講じる資料を得ることを急務としていた。このため県教育委員会と協議し、国庫補助・県費補助事業として、昭和56年度より確認調査を実施してきた。

昭和56年度は調査対象地東側の50,000㎡を実施し、はじめて本遺跡の性格の一端を把えることができた。その成果は先土器時代から中・近世に至る長い年月にわたって営まれたことが把えられ、奈良、平安時代の集落址が形成主体をなすことであった。遺構も住居址や土壙が数多く検出され、今後その広がりを確認することが必要とされた。それを受けて昭和57年度には調査区南西地区26,800㎡を実施、集落址の広がりを把えることができた。また、鉄滓や鞴片などの出土により、製鉄遺構の所在の想定もできるようになった。

これらの成果より調査対象地北西地区の確認調査が、より本遺跡を把える資料を得るため必要とされ、昭和58年度に再々度補助事業として実施するに至った。これは集落址の北西地区の広がりを把えるとともに、製鉄遺構の想定が可能かどうかに資料を与えると思われたからである。この確認調査の結果は(昭和58年度)、次に報告するとおりである。

なお、昭和56年度・昭和57年度の確認調査の概要については、それぞれの概報を参照・参考にされたい。

2．発掘調査の方法（第1図）

今年度の調査は前述の通り、昭和56・57年度に実施された確認調査の継続であり、そのため、調査の基本的な方針はこれらに準拠しつつ行なわれた。今回の調査により高津新山遺跡の全体的な把握を試み実施しているが、まだ不十分な点が多く、本調査での詳細な調査がまたれる。

今回の対象区域は全調査対象区域の北西部にあたり、全体的に緩やかな傾斜をもつ区域である。L区を東端とし、南側は7区の中央ラインを境いにする（第1図）。 第1図の濃い部分は昭和56・57年度の調査区域である。

試掘グリッド・トレンチ設定のための基準線は昭和56年度の確認調査時に多角点測量により設定された経距－23,750、緯距－31,900の地点から真北方向に延長したラインにより、20m方眼

を組み大グリッドとし、さらに5m単位のグリッドに分割している。

区域内には調査の未承諾地があり、一貫したグリッドトレンチを設定することが困難であったため、変則的な設定を行なわざるを得なかった。

今回、調査を実施した遺構は第05号住居址、第06号住居址、第01号土壙である。住居址は4分割による調査を基本とし、土層観察による堆積状況の把握、出土状況の実測を行なっている。カマドは煙道を通る中央ラインを基線とし、4分割により調査した。第01号土壙は長軸にそって半截し発掘した。

3．調査の経過

今年度の確認調査は、昭和58年7月20日より、昭和58年11月1日まで実施した。今回の調査対象面積は20,000㎡であるが、部分的に未承諾地を含んでいる。試掘面積は3,350㎡を行い、対象面積の16.7%になる。試掘グリッド総数は176ヶ所である。

調査は当初、調査区域内にグリッドの設定より行なわれた。区域内には収穫のまだ済んでいない畑が多く、発掘は極めて限られた範囲の中で実施され、順次収穫の終った区域に移行していった。遺構の確認も随時行なわれ、遺構調査の必要なグリッドの拡張を平行していった。第05号住居址の調査は昭和58年8月から9月にかけて、第06号住居址は同年8月、第01号土壙は同年9月に実施している。

埋め戻し作業は耕作可能な状態の原状に回復させるため、調査の終了した区域から順次行なわれ、同年9月30日から11月1日まで作業を継続している。

今回の調査により出土した遺物等の整理作業は昭和58年9月より、昭和59年1月まで行なった。

日誌抄

昭和58年7月11日（月）

調査区域に杭を設定する。初年度設定された大半の杭は耕作等により動いており、確実な杭より延長する。

昭和58年7月20日（水）

現場事務所にて調査参加者と調査等について打ち合わせを行い、Ｉ４、Ｊ４区から試掘を始める。時期が悪く調査参加者は少ない。

昭和58年7月26日（火）

Ｇ２・３、Ｊ５、Ｉ６区周辺のグリッドの試掘を行う。Ｇ２－４、Ｇ３－１・２に複雑な落ち込みを確認する。古墳時代後期の遺物が多量に出土し、同時期の住居址の重複の可能性がある。また、Ｉ６－４に黒褐色土の落ち込みが確認され、住居址を想定される。

昭和58年８月９日（火）

Ｉ６－４において確認された住居址のグリッド拡張を行う。方形を呈し、カマドの付設は明瞭ではないが、北側に焼土が混入している。第05号住居址とする。

昭和58年８月11日（木）

Ｈ５－４において検出された住居址の周辺部の拡張を行い、プランを確認する。（第06号住居址）北壁側に焼土がみられ、カマドが予想されるが、全体的に攪乱がはげしく不鮮明である。Ｇ４区周辺のグリッド試掘により住居址を確認している。

昭和58年８月22日（月）

Ｊ４、Ｆ４、Ｇ３区試掘を行う。２軒の住居址を確認する。05号住居址の発掘では土師器の出土量が少なく、鉄器・須恵器等の出土もみられる。

昭和58年８月31日（水）

Ｋ５区の試掘を行う。土師器等の若干の出土は認められるものの遺構は確認できない。05号住カマド脇より小型甕２個体が重さなって出土、実測・写真撮影を行う。

Ｇ５－３より楕円形状のピットを確認。覆土上面に完形の状態の甕が検出され、調査を実施。

昭和58年９月30日（金）

試掘したグリッドの精査を行う。また同時に精査の終了したグリッドから埋め戻し作業に入る。

昭和58年10月７日（金）

Ｆ５－16を精査中、確認済みの住居址の覆土中から完形土器が出土、平板により住居址のプランとともに実測し取り上げる。４点が出土しており、これらは住居址床面からの出土である。住居址の覆土は10cm程しかない。

昭和58年11月１日（火）

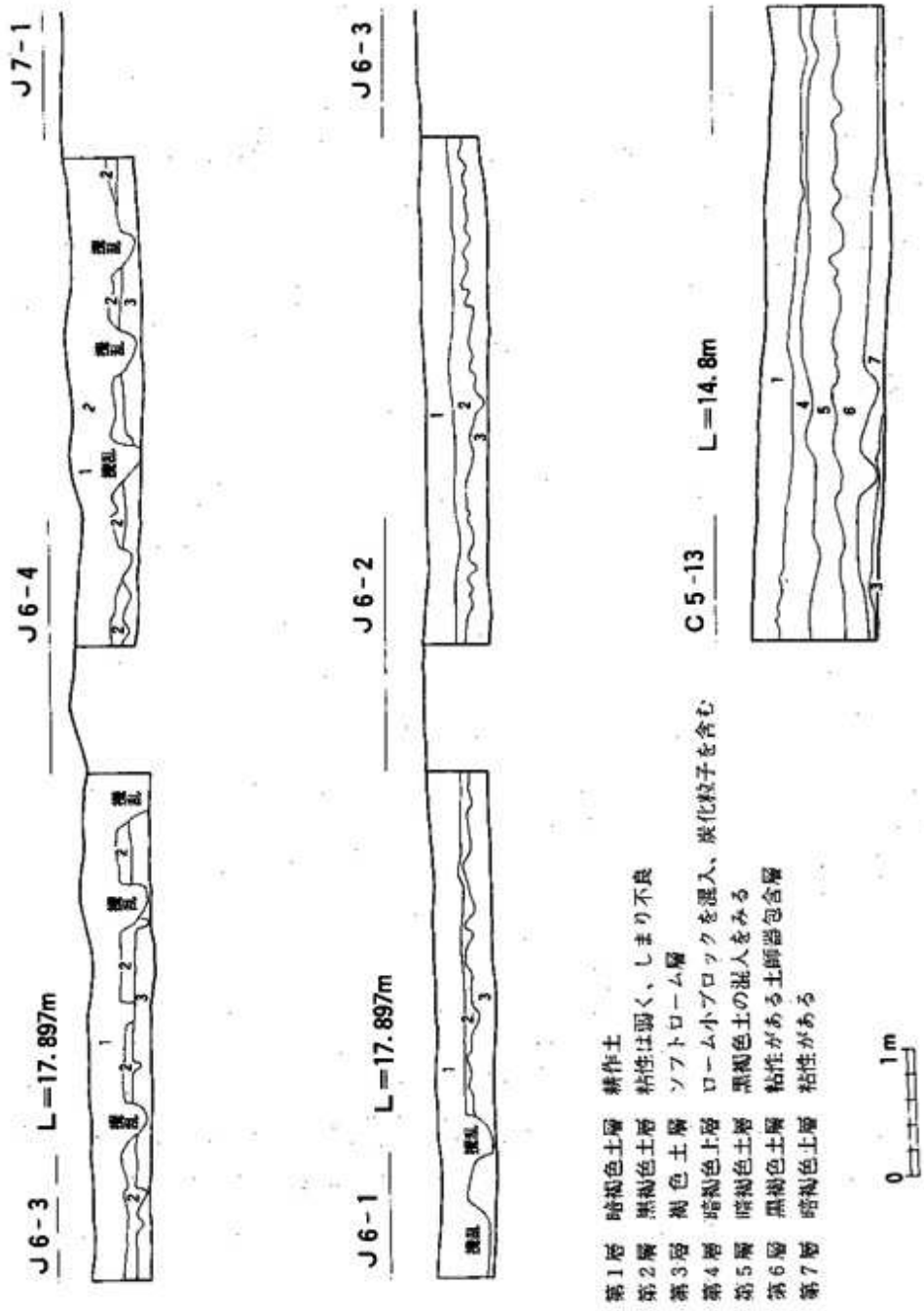
区域内全体の埋め戻し作業を終了する。

４．高津新山遺跡の層序（第２図・図版２）

今回、調査の実施された区域は本遺跡全体の中では北西側に位置している。この区域は台地の平坦面からなだらかに傾斜しながら沖積地へ続く場所にあたる。北端では比較的落差がはげしい。

Ｊ６－３・４は台地上の平坦な部分であり、比較的に堆積状況の遺存がよい。２層の黒褐色土はロームの上層に全体的に堆積していると思われるが、多くの平坦面では検出されていない。耕作等により、削られたと考えられる。

Ｃ５－13は西端での堆積状況である。ローム面まで１ｍ程の深さを測る。６層は土師器の包含層である。



第2図　高津新山遺跡土層図(1/60)

第Ⅱ章　遺　　構

今回の調査で検出された遺構の総数は54基であり、竪穴住居址15軒、土壙36基、溝状遺構３条を確認している。

本遺跡の中央には北東側から浅い谷がＩ11区周辺にまで入り込んでいるものと予想され、第Ⅰ・Ⅱ次の調査により、その周囲に住居址が展開していることが確認されている。今回の調査においても同様に理解される住居址の存在が明らかである。また同時に北西側に傾斜していく区域にも住居址が確認されており、時期の問題とともに注目される。

溝状遺構は最大巾２ｍ50cm程の１条がＪ４区からＨ６区に向けて延びており、他２条は不鮮明ではあるが部分的に確認されている。

１．第05号住居址（第３、４図・図版３）

本住居址は台地上の平坦面にあり、Ｈ６－16、Ｈ７－13、Ｉ６－４、Ｉ７－１グリッドに位置している。表土下25cmのソフトローム上面より確認された。耕作による攪乱は少ないと判断されたが、住居址南隅の部分に溝状の攪乱が床面にまで及んでいる。

住居の平面的な形状は北西壁４ｍ、南東壁４ｍ50cmを測り、台形を呈している。前述のように攪乱を受けてはいるが壁の上場は遺存しており、隅の形状は比較的明瞭に確認され、ほとんど丸みをもたない。また各壁は直線的に作られている。中軸線での計測で南北方向４ｍ43cm、東西方向４ｍ40cmを測る。主軸はＮ－25.5°－Ｗ。

壁高は平均35cm程掘り込んでいる。主柱穴であるPit １～４を結ぶ範囲内に硬く踏みかためられた状態の床面が検出されている。しかしPit ５から住居址中程までは比較的軟弱な部分が存在する（第３図一点鎖線内）。床面を形成している層はハードロームであり、焼土粒子の混入も全体的にみられる。

周溝はカマドが付設される北西壁下では検出されなかったが、他の壁下には巾20～30cm、深さ10cmで掘り込まれている。覆土は暗褐色土層に小ロームブロックを混入し、炭化材や焼土粒子を含み、全体的にしまりがない。

主柱穴は北西壁に２ヶ所、隅よりもやや中央寄りのカマド脇に、南東側の２ヶ所の柱穴は壁下にあり、主軸線寄りに位置している。深さはPit １が55cm、Pit ２が48cm、Pit ３が53cm、Pit ４が52cmを測る。Pit ５は南東壁下主軸上に位置しており、主軸方向に長い楕円形を呈し北側に段を有する。深さは30cmを測る。カマド脇東側には不整形の皿状のピットがあり、深さ20cmを測る。

周溝内には不規則に小ピットが掘り込まれており、径が10cm前後、深さも10cm程であるが、東隅のピットは深さ20cmを測る。

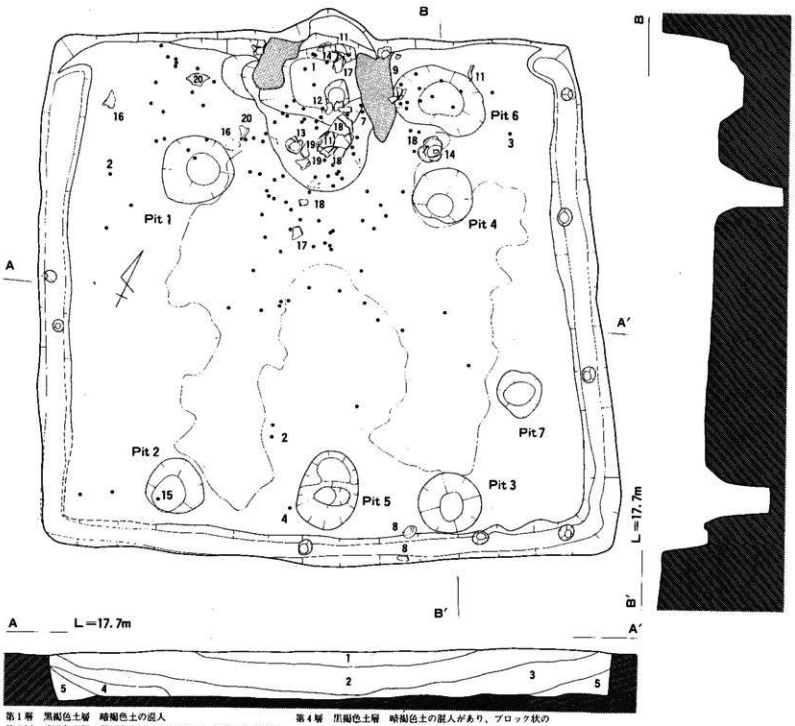
カマドは北西壁のほぼ中央に位置しており、天井部や袖の一部が崩壊し、良好な遺存状況ではない。構造は火床が壁直下に段をもって掘り込まれており、さらに底面に直径20cm、深さ17cmのピットがある。煙道は一部壁面を利用し、中程から傾斜をもって壁を掘り込んでいる。袖は火床の掘り込みの両側に土台を作りその上に砂と粘土により築き固めている。

遺物は総数661点を数える。土師器が大半を占めているが、鉄器・須恵器なども含まれている。遺物の出土状況はカマド内部およびその周辺に大半のものが出土しており、住居址内の他の部分ではほとんど出土していない。層位としては床面直上のものと直上層中のものが多い。

出土遺物（第5～8図・図版5～8）

法量（　）内は推定値

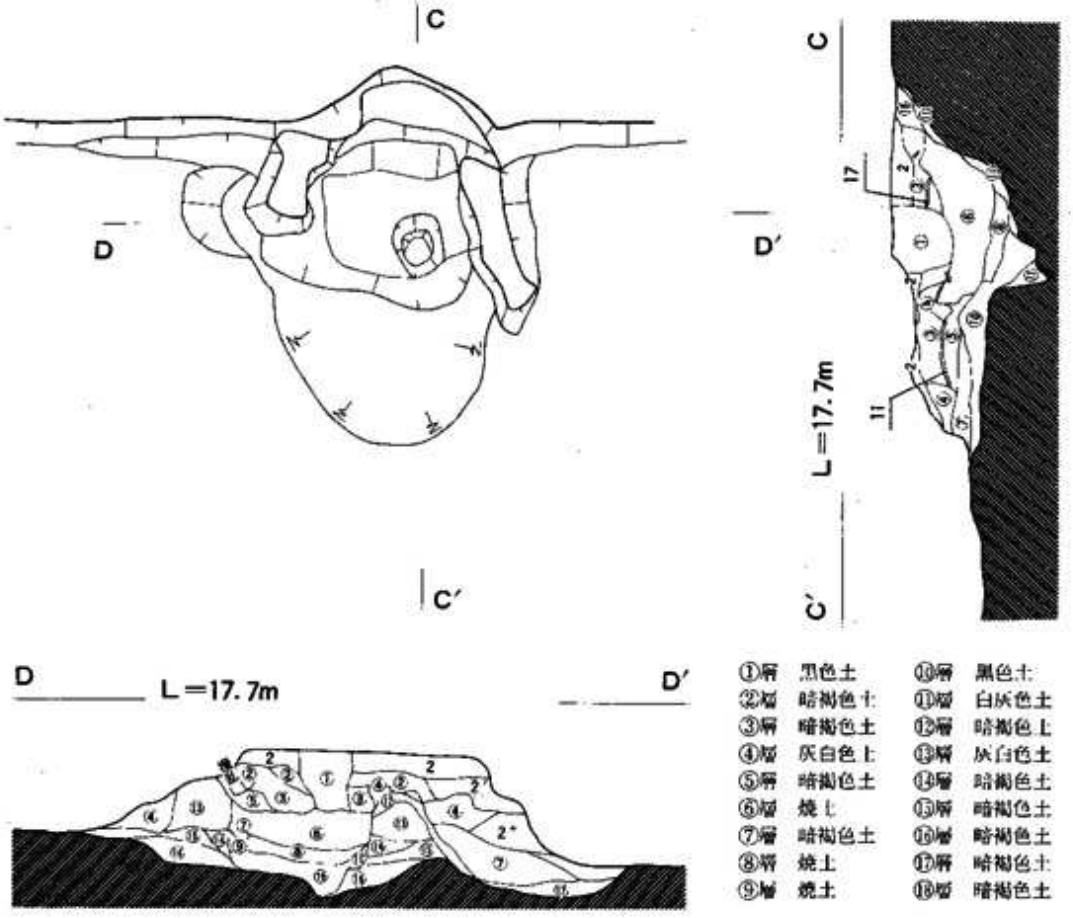
番号	器形部位	法量(cm)	器形の特徴	整形の特徴	胎土	焼成色調	備考
1	坏	口径—11.8 器高—4.05 底径—6.4	底部より内弯気味に立ち上がり、そのまま口縁に至る。	体部をナデにより整形し、底部切り離し後全面を回転ヘラ削り、体部下端も回転ヘラ削り	雲母、石英等の砂粒を混入	普通 黄褐色	カマド奥煙道部よりほぼ完形で出土しているが周辺にも破片が散乱する。
2	坏	口径—(12) 器高—3.8 底径—(7)	底部より開き気味に立ち上がり、口唇部でやや外反。	体部はナデにより整形され、回転糸切り後、外縁部をヘラ削り、体部下端も回転ヘラ削り	雲母等の細砂粒を混入	普通 褐色	南東隅の中央3層に破片の状態で出土。底部に「井」の墨書
3	坏	口径—(12) 器高—4.2 底径—(5.9)	底部よりなめらかに内弯して立ち上がり、口唇部でわずかに歪みをもつ	体部はナデにより整形底部は全面回転ヘラ削り後、体部下端にも回転ヘラ削り。	砂粒を混入	普通 淡黄褐色	カマド周辺の2、3層中から出土している。1/3現存
4	坏	口径—約14 器高—3.8 底径—約8.5	内弯気味に立ち、口縁部で外傾する。	体部はナデにより整形、回転糸切り後外縁を回転ヘラ削りし、体部下端も回転ヘラ削り。	雲母等の細砂粒を混入	普通 淡黄褐色	Pit5西脇の直上層中からの出土、体部外面に判読不明の墨書。
5	坏	口径—13.6 器高—不明 底径—不明	なだらかに立ち上がり、口唇でわずかに外反する。底部欠損。	体部をナデにより整形、遺存部にはヘラ削りはみられない。	雲母等の砂粒を混入	普通 淡黄褐色	カマド脇北隅側から出土。文字は判読できないが、体部に墨書。
6	坏	口径—14.9 器高—4.2 底径—6.5	底部より開き気味に立ち、口縁でわずかに外反する。	体部はナデにより整形、内面には凹凸が残る。底部は全面回転ヘラ削り、体部下端にも回転ヘラ削りを行う。内面は全面にミガキ。	雲母等の細砂粒を混入	普通 淡黄褐色	Pit4の西脇からの出土
7	坏	口径—13.6 器高—4.3 底径—7.0	底部は凸面のため不安定である。体部は内弯気味に立ち上がり、中位より外傾して口縁部に至る。	体部はナデにより整形、底部は全面手持ヘラ削り。体部下端にも同様に手持ちヘラ削り。	砂粒を混入	普通 黒褐色	カマド火床から住居址中央部にかけて散乱して出土。



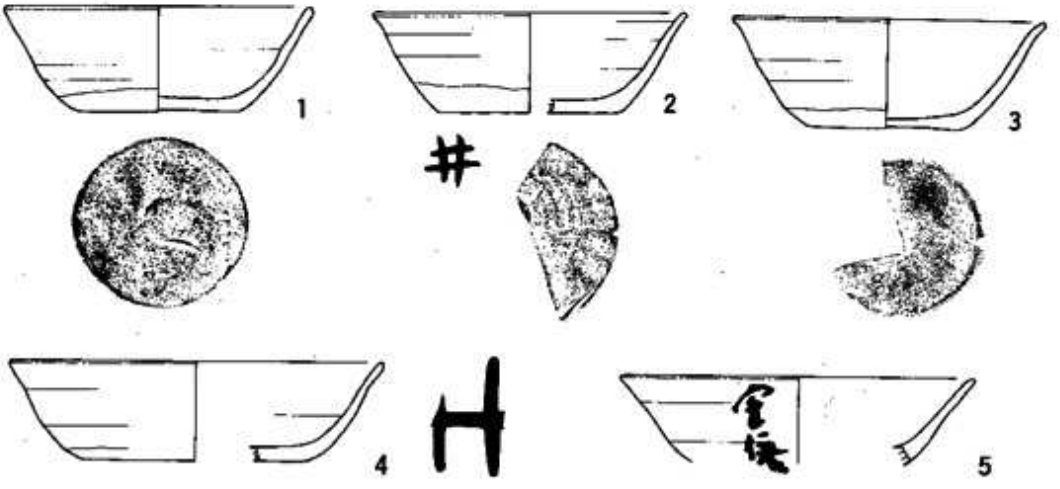
第1層　黒褐色土層　暗褐色土の混入
第2層　暗褐色土層　黒褐色土の混入がみられ、焼土粒子を含む
第3層　暗褐色土層　褐色土を若干混入し、焼土粒も含む
第4層　黒褐色土層　暗褐色土の混入があり、ブロック状の灰白色粘土を混入
第5層　暗褐色土層　ローム粒子を混入

0　50cm

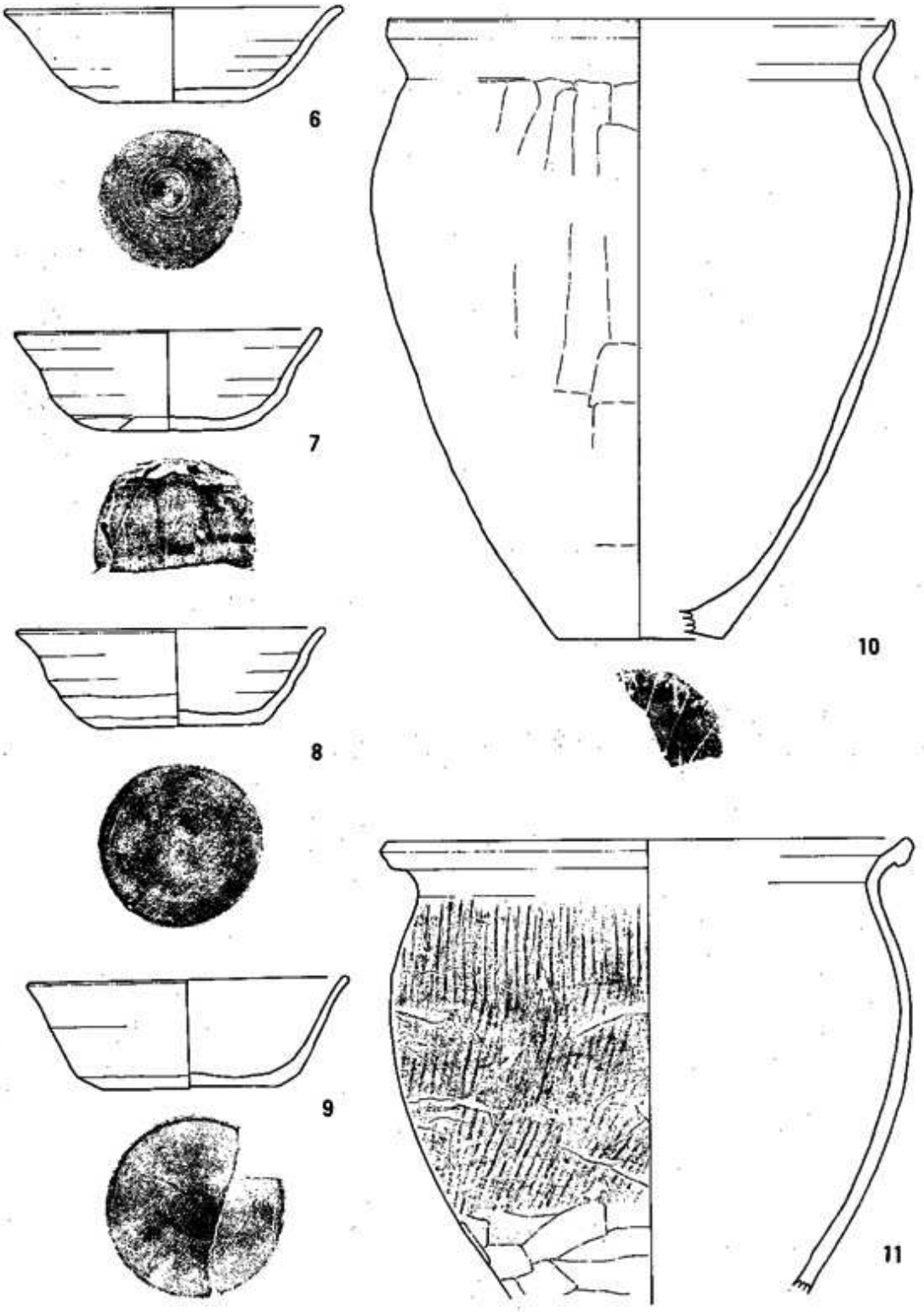
第3図　第05号住居址実測図(1/30)



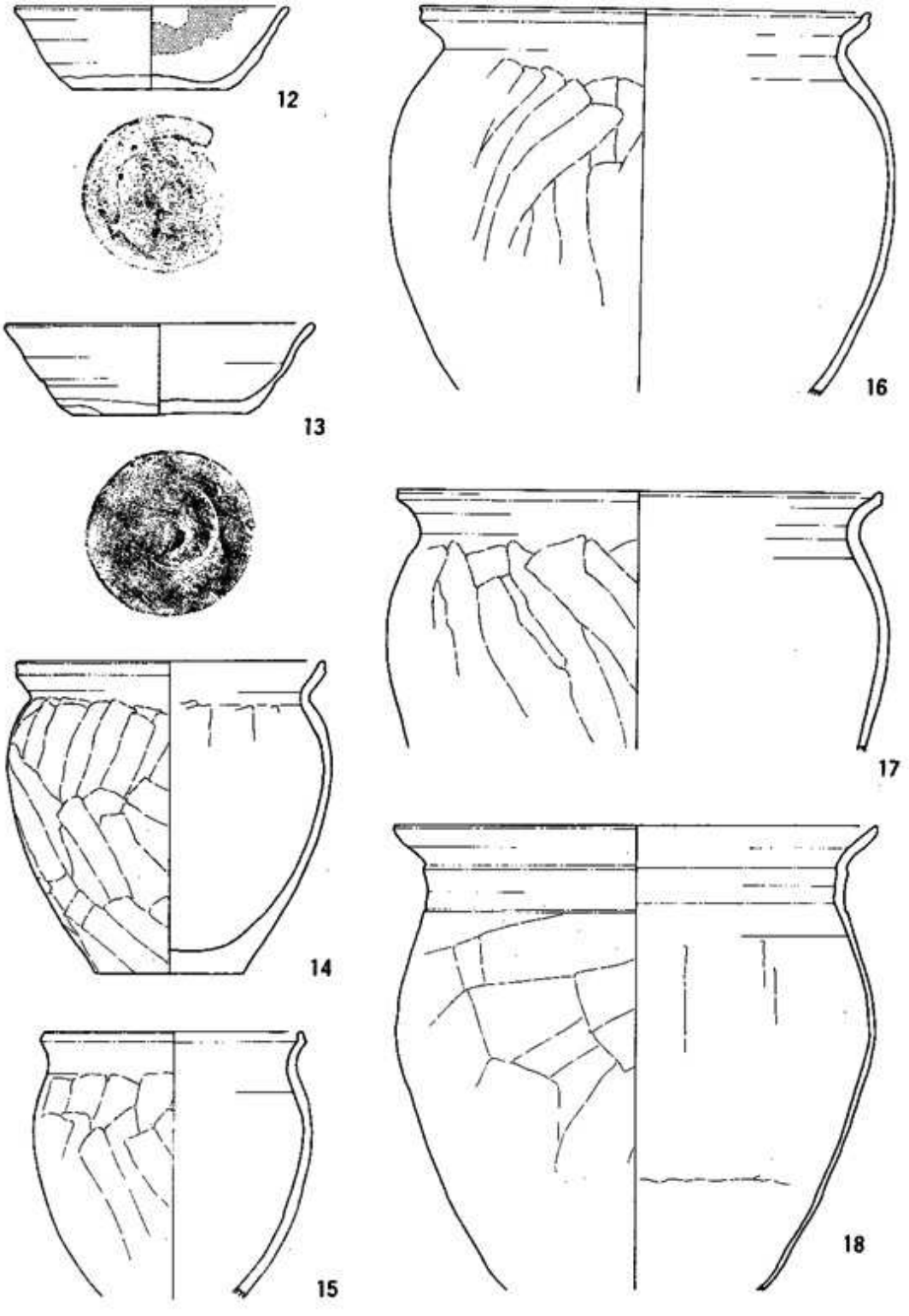
第4図　第05号住居址カマド実測図(1/30)



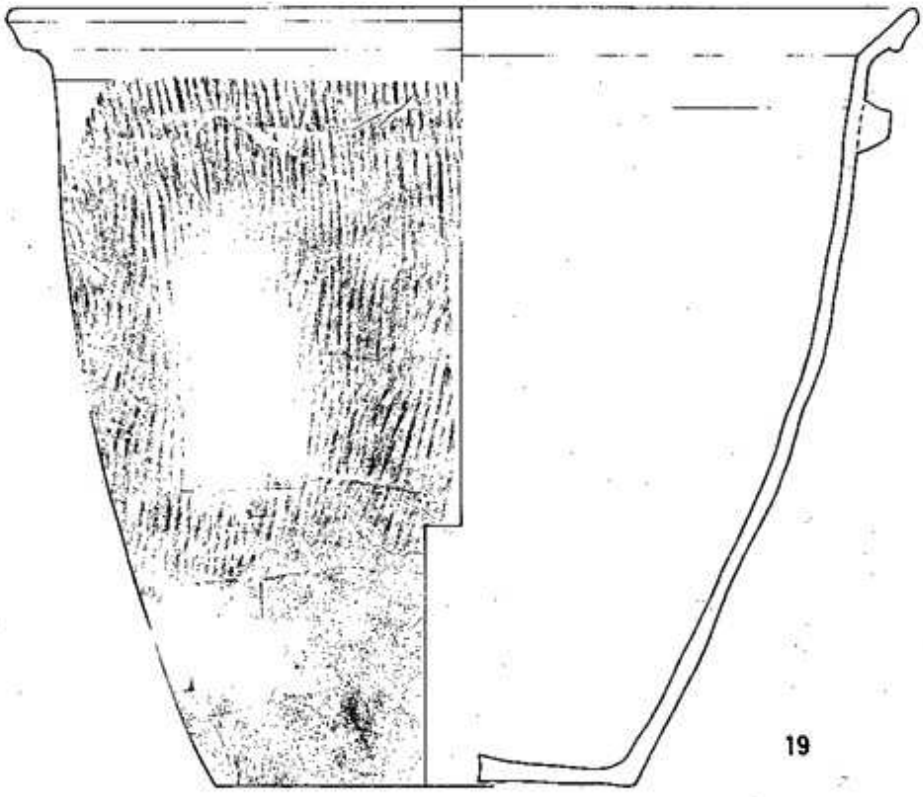
第5図　第05号住居址出土遺物(1) (1/3)

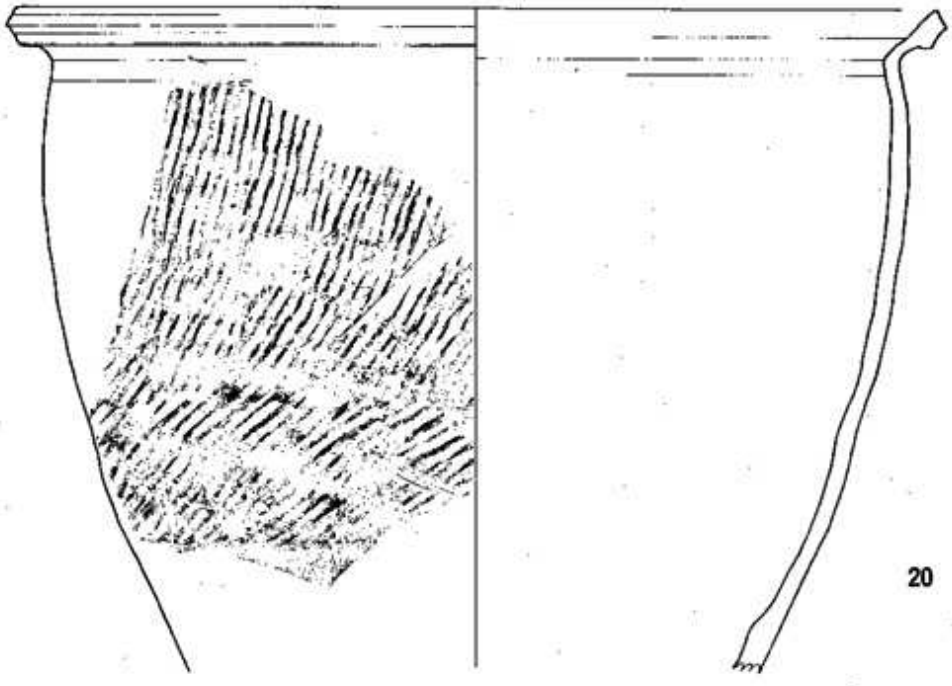


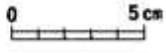
第６図　第05号住居址出土遺物(2)（1/3）



第７図　第05号住居址出土遺物(3) (1/3)







第8図　第05号住居址出土遺物(4) (1/3)

番号	器形部位	法量(cm)	器形の特徴	整形の特徴	胎土	焼成色調	備考
8	坏	口径—13.4 器高—4.5 底径—7.4	底部より内弯気味に立ち、口縁部で外反する。口縁部で全体的に歪みをもつ。	体部はナデにより整形、体部内面では中位で、強く押えられている。切り離し後、全面回転ヘラ削り、体部下端には2段に回転ヘラ削り	石英等の細砂粒を混入	普通 黒褐色	Pit3の南側周溝上に2つに割れた状態で出土
9	坏	口径—(14.2) 器高—(4.9) 底径—7.8	大きめの底部より外傾し、さらに直立気味に直線的に立ち上がる。口縁部でわずかに外傾する。	体部はナデにより整形、底面の全面と体部下端を回転ヘラ削り。内面には全体にミガキをかけている。	雲母等の細砂粒を混入。	普通 淡黄褐色	カマドの東側袖とPit6との間の床面直上からの出土。
10	甕	口径—(23) 最大径—(14.4) 底径—(7.4) 器高—(28)	小さな底部より直立気味に立ち上がり、胴部上位に最大径をもつ。頸部から外反し、口唇部で屈曲し直立。	口縁内外面は横ナデにより整形。胴部の上位は縦方向、下位は横方向のヘラ削り。内面はナデツケ。	1mm大の砂粒を混入	普通 淡黄褐色	カマド両脇から分散して出土。口縁部から底部までのわずかな遺存のため口径・底径は推定による。底部木葉痕
11	甑	口径—23 底径—20.6	底部は欠損しているが、胴部中程よりやや上位に胴部の最大径をもち、丸みをもつ。頸部から外反し、口唇で折り返す。	口縁から頸部まで内外面とも横ナデ整形。胴部はタタキ。下端には横位のヘラ削り。	細砂粒を混入	普通 淡黄褐色	カマド周辺、住居址中央、Pit6内など広く散乱するが、カマド火床内に主にまとまって出土。
12	坏	口径—12.2 器高—3.7 底径—6.5	底部より内弯気味に立ち上がり、口唇でわずかに外反。	体部はナデにより整形、切り離し後体部下端回転ヘラ削り。	石英、雲母等の細砂粒混入	普通 淡黄褐色	カマドの火床部南側からの出土。体部内面にススが付着している。
13	坏	口径—12.8 器高—4.1 底径—(7.7)	底部より内弯気味に立ち、口唇部でわずかに外傾する。	体部ナデ整形時点でむらがある。回転糸切り後、外縁部に四角形を描くように手持ヘラ削り、体部下端にも手持ヘラ削りを4回行う。	石英、雲母等の細砂粒を混入。	普通 淡黄褐色	カマドの火床の南側よりの出土
14	小型甕	口径—13.6 最大径—14.8 底径—6.6 器高—14	厚め底部より急角度で直線的に立ち上がり、胴部上位で最大径をもつ。頸部で折れ、口縁は外傾し、口唇で直立	内外面とも頸部まで横ナデにより整形され、胴部上端から縦・斜方向のヘラ削りを行う。内面はヘラによるナデツケ。底部ヘラ切り離し。	1mm前後の砂粒を多量に混入	普通 暗褐色	Pit4の北側床面上より出土、甕の底部と重なるようにして、ほぼ完形の状態で確認されている。
15	小型甕	口径—(11.6) 最大径—(12.6) 現存高—11.9	底部は欠損しているが、ゆるやかなカーブを描き胴部上位に最大径をもつ。頸部からやや外反し、口唇部で屈曲、内傾する。	外面は頸部まで、内面は胴上位まで横ナデ。胴部外面縦位のヘラ削り、内面はナデツケ	砂粒の混入が多い	普通 淡黄褐色	カマド内およびその周辺に散乱して出土。
16	甕	口径—(20.2) 胴部最大径—(22.6) 現存高—16.5	胴部上位に最大径をもつ、口縁は器厚が厚く、頸部より大きく開き、口唇部で直立、口唇外面に凹線を回らす。	口縁から胴部上端までを横ナデにより整形、胴部は縦位か斜位のヘラ削り。	石英等の砂粒の混入	普通 暗褐色	カマド周辺から西側にかけて散乱して出土

番号	器形部位	法量(cm)	器形の特徴	整形の特徴	胎土	焼成色調	備考
17	甕	口径ー(21.7) 最大径ー(22.4) 現存高ー11.6	胴部上位に最大径をもち、なだらかに内弯して頸部に至る。頸部はゆるやかに外反しており、口縁もそのまま外反、口唇で屈曲し直立する。	内外面とも頸部まで横ナデにより整形し、胴部は斜方向にヘラ削り	砂粒を多量に混入	普通 淡黄褐色	カマド火床部から住居址中央にかけて、床面近くに散乱している。
18	甕	口径ー(21.6) 最大径ー(21.4) 現存高ー20.8	底部は欠損しており、胴部上位に最大径。頸部はほとんど直立し、口縁で外反。口縁部でわずかに内弯気味になる。	口縁部、頸部の内外面とも横ナデにより整形。胴部外面は横、斜、縦方向に順次方向を変えヘラ削り、器厚調整を行う。内面はヘラナデツケ。	多量の砂粒を混入	普通 淡黄褐色	火床内より出土しているものが中心になっており、カマド内部および周辺に多量に散乱し、床面よりも浮いた状態で出土。
19	甑	口径ー(34.9) 底径ー16 器高ー29.8	底部の中心に円形、その周囲に長楕円形の孔が4つ配される。底部より直線的に立ち上がる。頸部で屈曲し、外傾して口縁、折り返し。	口縁から頸部まで内外面とも横ナデにより整形、胴部上半はタタキ。胴部下位は横位のヘラ削り。	石英等の細砂粒を混入	普通 暗褐色	胴部上位に方形状の把手をもつ、単位不明。住居址全体に散乱して出土するが、特にカマド周辺に多い。
20	甑	口径ー(36) 現存高ー25.4	なだらかに立ち上がり、上位に胴部の最大径をもつ。頸部で屈曲し外傾する。口縁は折り返し。	口縁から頸部まで内外面とも横ナデによる整形、胴上半はタタキ。下端には横方向のヘラ削りを行う。	石英等の細砂粒を混入	普通 暗褐色	Pit1の上面および周辺からの出土

2．第06号住居址（第9、10図・図版9）

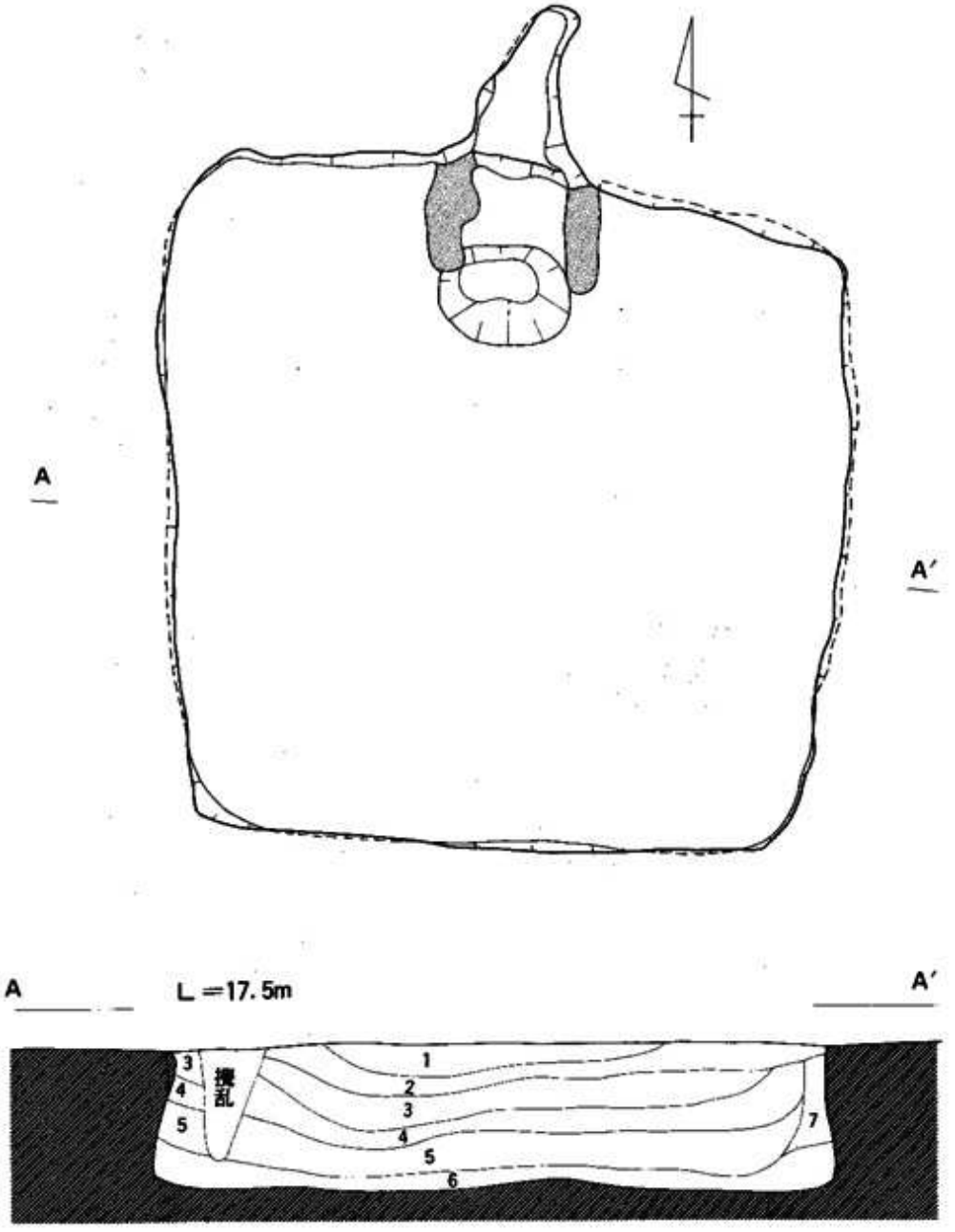
本住居址は第05号住居址の北西側、Ｈ５－４グリッドに検出された。当初、カマドの煙道部分には攪乱が掘り込まれており、カマドの付設を想定することは困難であった。さらに、住居址の全体にも深い芋穴等の攪乱が多く（図版10）、良好な遺存状況とは言えない。

住居址の形状は西壁が若干長くなる方形を呈する。中軸線で南北2.8m、東西2.7mを測る。主軸はN－1°－E。

隅の形状はほとんど丸みをもたない。各壁の断面はややオーバーハングの状態を呈しており、深さ50～60cmを測る。平面図で若干蛇行しているのは、壁の上部が調査中にも崩壊した部分があるためである。

床面は特に踏み硬めた状況にはなく、ハードロームが比較的きれいに確認されている。また、柱穴は検出されず、床面の精査をもっても確認できていない。

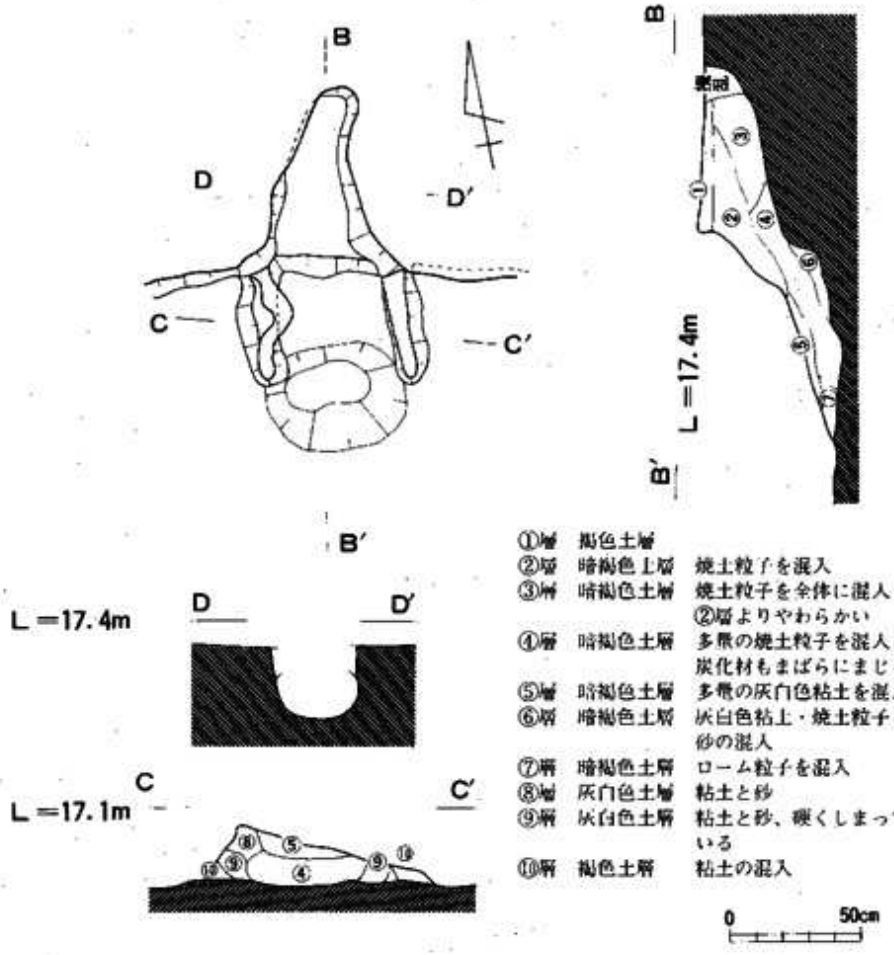
カマドは北壁の中央に位置している。遺存状況は前述のように攪乱を受けており、天井の一部が残る程度であり、良好とはいえない。火床は壁から25cm程離れて掘り下げており、煙道には床面と壁の下半をあて、さらに壁上半を住居址外に65cm程まで延ばしている。袖は火床部を挟み込



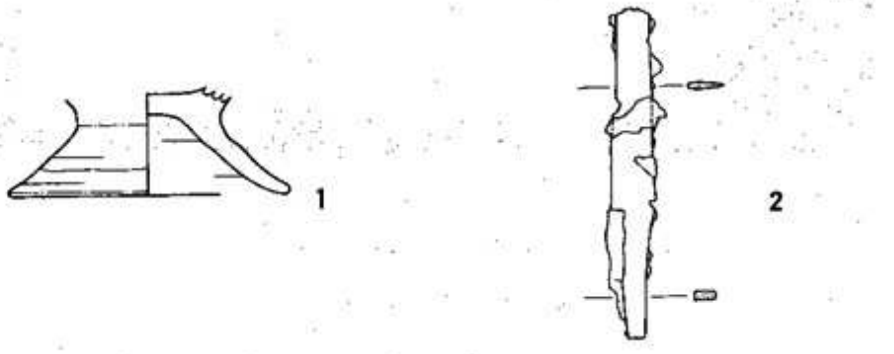
第1層　黒褐色土層　暗褐色土を混入、ローム粒子を含み、しまりが良い。
第2層　褐色土層　暗褐色土を混入する。
第3層　黒褐色土層　焼土ブロックを多量に混入、炭化材も含まれる。
第4層　暗褐色土層　ローム粒子を混入する。
第5層　褐色土層　暗褐色土、ロームブロックを混入する。
第6層　褐色土層　暗褐色土、ロームブロックを混入し、第5層よりも明るい。
第7層　褐色土層　しまりの良好な土層であり、ロームブロックを混入する。

0　50cm

第9図　第06号住居址実測図(1/30)



第10図　第06号住居址カマド実測図(1/30)



第11図　第06号住居址出土遺物(1/3)

むように両側に砂と粘土により築いており、西側の袖の上端には天井の一部らしいものを確認している。

出土遺物（第11図・図版11）

1は台部である。住居址中央より、ややカマド寄りの床面直上から出土している。底部より「ハ」の字形に大きく開く。内外面ともに横ナデにより整形される。

2は刀子である。住居址東側壁近くの7層下部からの出土である。両側の先端部は欠損している。現存長12.7cm、最大巾1.65cm、厚さは刀身で2mm弱、柄で3.5mmを測る。

3．第01号土壙（第12、13図・図版12）

本土壙はG5－3グリッドに位置しており、20cmの表土下ハードローム面より確認された。検出時点で覆土上面より、完形を予想される土器（第13図－2）が出土しており、このままでは破損の可能性もあるため、調査を実施した。

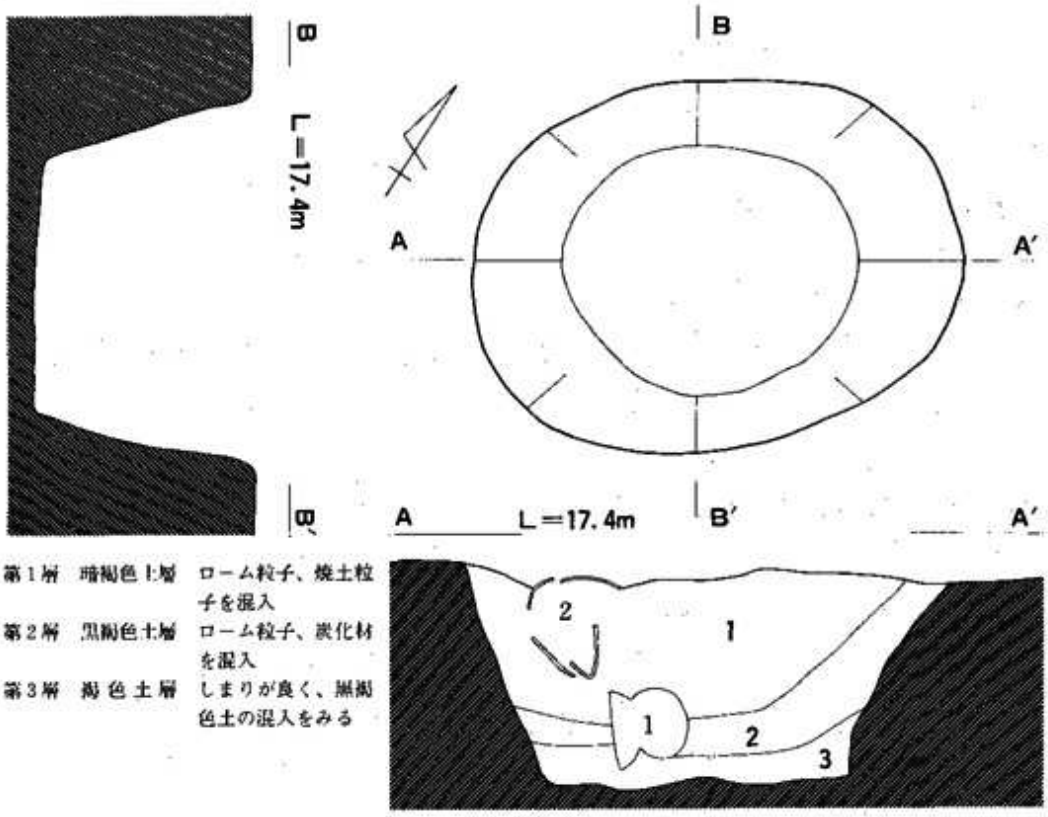
形状は長軸94cm、短軸76cmを測り、楕円形を呈している。土壙の底面も同様に楕円形を呈し、長軸51cm、短軸47cmを測る。深さ37～43cm。

覆土は3層に分層され、堆積状況から自然埋没と考えられる。全体的に焼土粒子を混入し、炭化粒子も2・3層にみられる。

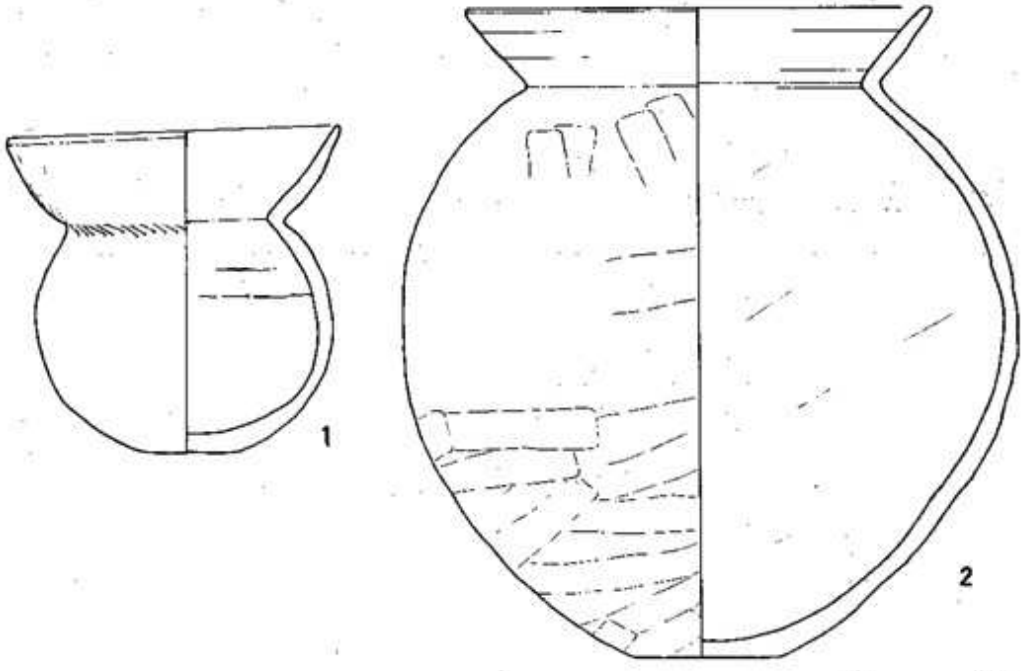
遺物の出土状況は前述のように甕（第13図2）が土壙上部にほぼ完形の状態で出土しており、長軸上の南西側に位置している。また坩（第13図1）は甕の下、土壙の中位から横倒して出土している。

出土遺物（第13図・図版13）

番号	器形部位	法量(cm)	器形の特徴	整形の特徴	胎土	焼成色調	備考
1	坩	口径－12.7 器高－3.2 胴最大径－11.4 底径－12.3	胴部は球形を呈し、底部は極めて小さい。口縁は内弯して立ち上がり、最大径をもつ。	口縁は横ナデ後、斜方向のミガキ、胴部はヘラ状工具による整形痕が残る。胴部は横位のヘラ削り後、全体にミガキをかける。	石英等砂粒を多量に混入	普通 褐色	内外部ともに風化がはげしい。2層中の出土
2	甕	口径－17.6 器高－24.9 最大径－20.4 底径－5.5	小さな底部より内弯して立ち上がり、胴中位で最大径をもつ、やや長めの球状を呈す。口縁は外反気味である。	口縁では内外面とも横ナデにより整形。胴部は風化がはげしいが、上半では縦、下半では横方向のヘラ削り、内面ナデツケ。	1mm程の砂粒を混入	普通 暗褐色	全体的に風化がはげしい。



第12図　第01号土壙実測図(1/15)



第13図　第01号土壙出土遺物(1/3)

第Ⅲ章　グリッド出土遺物

1．縄文時代の遺物（第14図・図版14）

土　器

縄文時代の遺物は、中期加曽利Eがややまとまって出土し、これに前期、中期、後期のものが少量伴ったにすぎない。また出土量は絶対的に少なく、56年度・57年度確認調査に比しても乏しいものであった。

第Ⅰ群土器　胎土中に繊維を含む焼成不良の土器で、いずれも小破片である。3は原体の粗い縄文が施され、4はやゝていねいな施文である。5は付加状縄文が施されるが、その施文は粗い。いずれも内面は、入念な器面調整が行われる。該期の遺物は3回にわたる確認調査で散見できるが、いずれも少量の出土である。前期前半の黒浜式に属すると考えられる。

第Ⅱ群土器　アナダラ属系の貝殻腹縁を主として使って施文する、焼成の比較的良好な土器である。5、6は貝殻腹縁によるコンパス文をこまかく施したもので、10は貝殻腹縁文を地文として、半截竹管による沈線を横に浅く引いたものである。9は貝殻腹縁文を竹管によって区画されたもの。いずれも前期後半の浮島・興津系に属する土器である。

第Ⅲ群土器　中期初頭から前半にかけてのものを一括する。11は焼成良好で、内面は入念な器面調整がなされた土器である。縄文を地文とし、S字文を施す。12は口縁部近くのもので、沈線による連続した屈曲文の一部がみられる。胎土に雲母・石英などがみられ、12は阿玉台に属すると考えられる。

第Ⅳ群土器　中期後半加曽利Eに属する土器群で、本遺跡の縄文時代の遺物の主体となすものである。13はやゝ低い隆起帯によって渦巻文をなし、沈線によって高さを有させるものである。14は口縁部文様帯が衰退してゆくもので、沈線によって文様をなす。15～23はいずれも胴部破片で、懸垂文を施すものである。15は頸部破片で、口縁部の隆起帯が一部認められる。これらは殆んど単節縄文を地文とし、複節となるものは見うけられなかった。

第Ⅴ群土器　後期の土器を一括した。25は縄文を地文として、条線を引くものである。26は連続して爪形文を口縁に施し、口縁部下は条線を施文する。前者は加曽利B式に、後者は安行Ⅰ式に属する、いずれも粗製土器である。

石　器

縄文時代に属する石器は石鏃が2点出土したのみで、他には黒曜石、チャートの剥片や砕片が認められた。いずれも表土耕作土中の出土で、包含層は認められなかった。1は基部の抉りの深い凹基無茎鏃、腸抉のやゝ長いもので、粗雑なつくりである。2は形状が五角形状で、抉りの浅

い、断面変形の厚みのあるものであった。いずれもチャートを使用する。

2．弥生時代の遺物（第15図・図版15）

本期に属する遺物が出土したのは、今回の確認調査がはじめてであり、量的には極めて希れで、総数5片であった。いずれも小破片であり、器形復原には至らなかった。

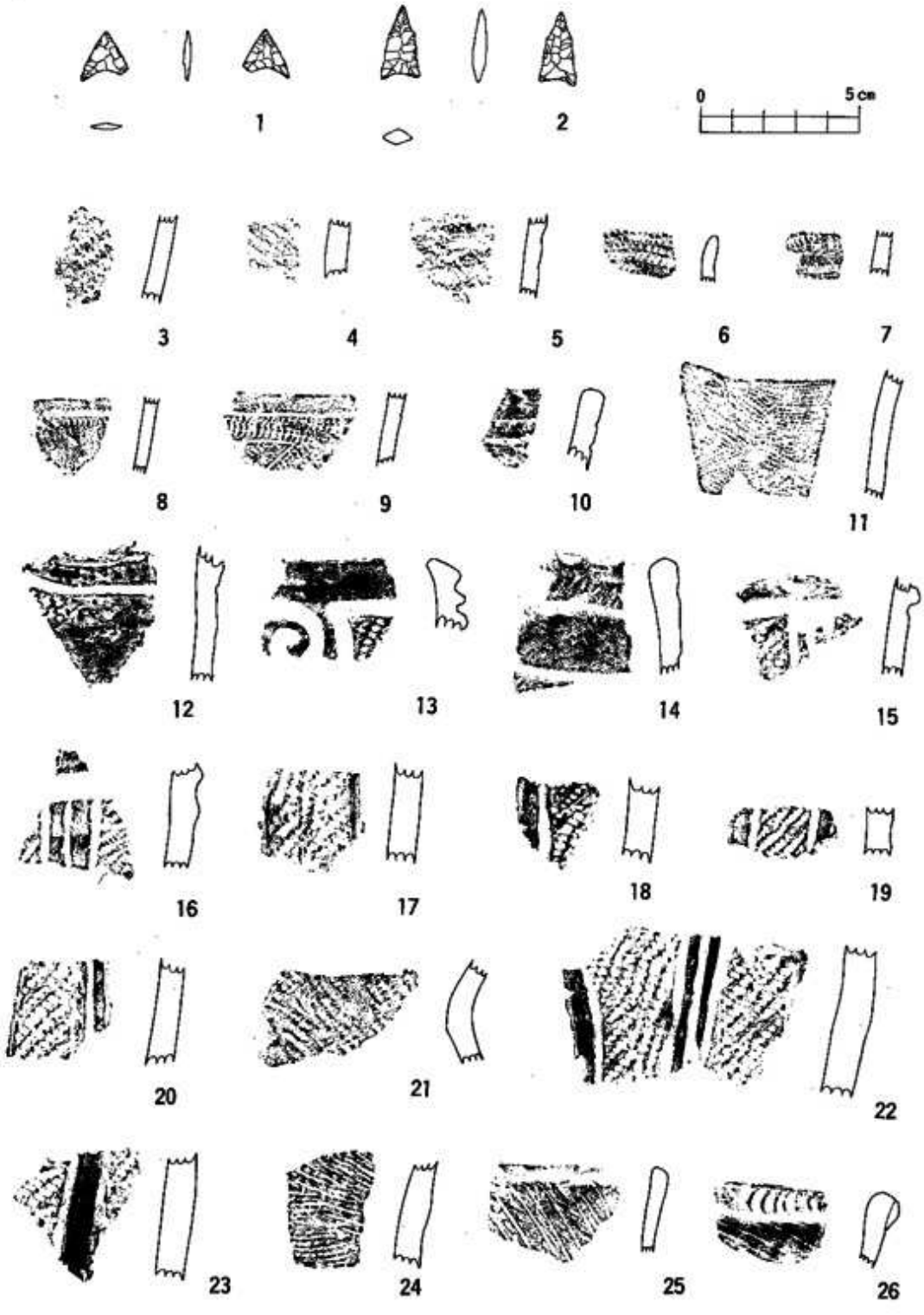
1～3は文様及び整形などから同一個体と考えられるもので、色調はいく分くすんだ赤色である。節の緻密な単節縄文を施文したのち、竹管によって浅く鋸歯状に区画するもので、後期前半の久ケ原式に属すると考えられる。焼成は普通、胎土はや・砂質である。E3－4グリッドの表土層出土で、谷津に下る台地縁辺の際である。

本期に属する遺構は確認されていないが、新たな資料が加わったわけであり、谷津際の台地縁辺部に対し、今後精査を要すると思われる。

3．グリッド出土の土師器（第16、17図・図版15、16）

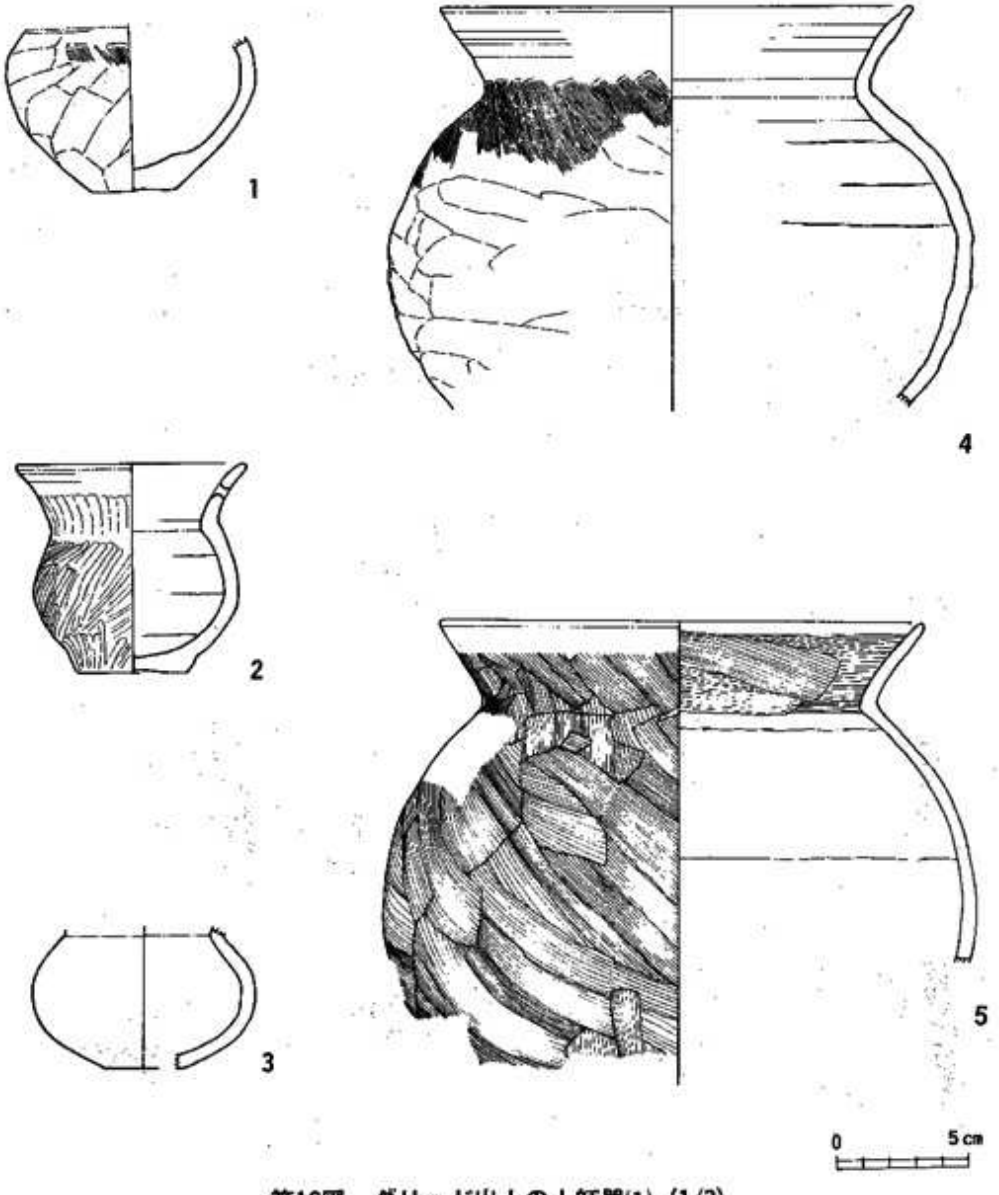
法量（　）内は推定値

番号	器形部位	法量(cm)	器形の特徴	整形の特徴	胎土	焼成色調	備考
1	小型壺	口径－不明 胴部最大径 －9.6 底径－3.1 現存高－6.3	小さな底部より、胴部上位にある最大径まで大きく張り出し、内弯して頸部に至る。口縁部欠損。	胴部上半は横位のヘラ削り、下半は斜方向のヘラ削り整形。肩部に部分的に刷毛整形もみられる。内面には輪積み痕が残り、ヘラナデツケ。	石英等の砂粒を多量に混入	普通 褐色	C5－13グリッド出土 内面は灰色
2	坩	口径－8.6 器高－8 胴部最大径 －7.8 底径－4.1	底部より1cm程立ち上がり、緩やかなカーブをもって頸部に至る。最大径は中位にある。頸部より屈曲し、大きく外反する口縁をもつ	胴部には斜方向のヘラ削り整形後、斜方向のミガキによる調整を行う。口縁下半に縦方向のヘラナデによる整形後、上半部に横ナデを行う。	石英等の砂粒を混入	普通 淡黄 褐色	F5－16グリッド検出 住居址覆土中の出土、 口縁部中程の対称する位置に2個づつの穿孔
3	小型壺	口径－不明 胴部最大径 －8.6 底径－(3)	小さな底部より大きく張り出し、胴中位に最大径をもつ。口縁部胴部大半は欠損。	ヘラ削りによる整形を行なっているようであるが不鮮明。	石英等の砂粒を混入	普通 淡黄 褐色	F3－16グリッド出土
4	甕	口径－17.8 胴部最大径 －22.2 現存高－15.4	底部は欠損しているが、最大径は胴部上位にある。頸部は緩やかに屈曲し外反。口縁もやや外反して開く。	口縁は内外面とも横ナデにより整形し、胴部は横位のヘラ削り後、頸部から胴部上半にのみ刷毛目による整形を行う。	砂粒を混入	普通 淡黄 褐色	F5－16グリッド検出 住居址の覆土中出土
5	甕	口径－18.5 胴部最大径 －22.6 現存高－13.5	底部は欠損しており不明であるが、胴部は球状を呈し、最大径は中位にある。頸部で緩やかに屈曲し口縁で外傾する。	胴部全体を斜・縦方向に刷毛目による整形を行う。口縁は斜方向の刷毛目の後、上端を横ナデ。口縁内面にも横方向の刷毛目。	石英等の細砂粒を混入	普通 褐色	F5－16グリッド検出 住居址の覆土中出土

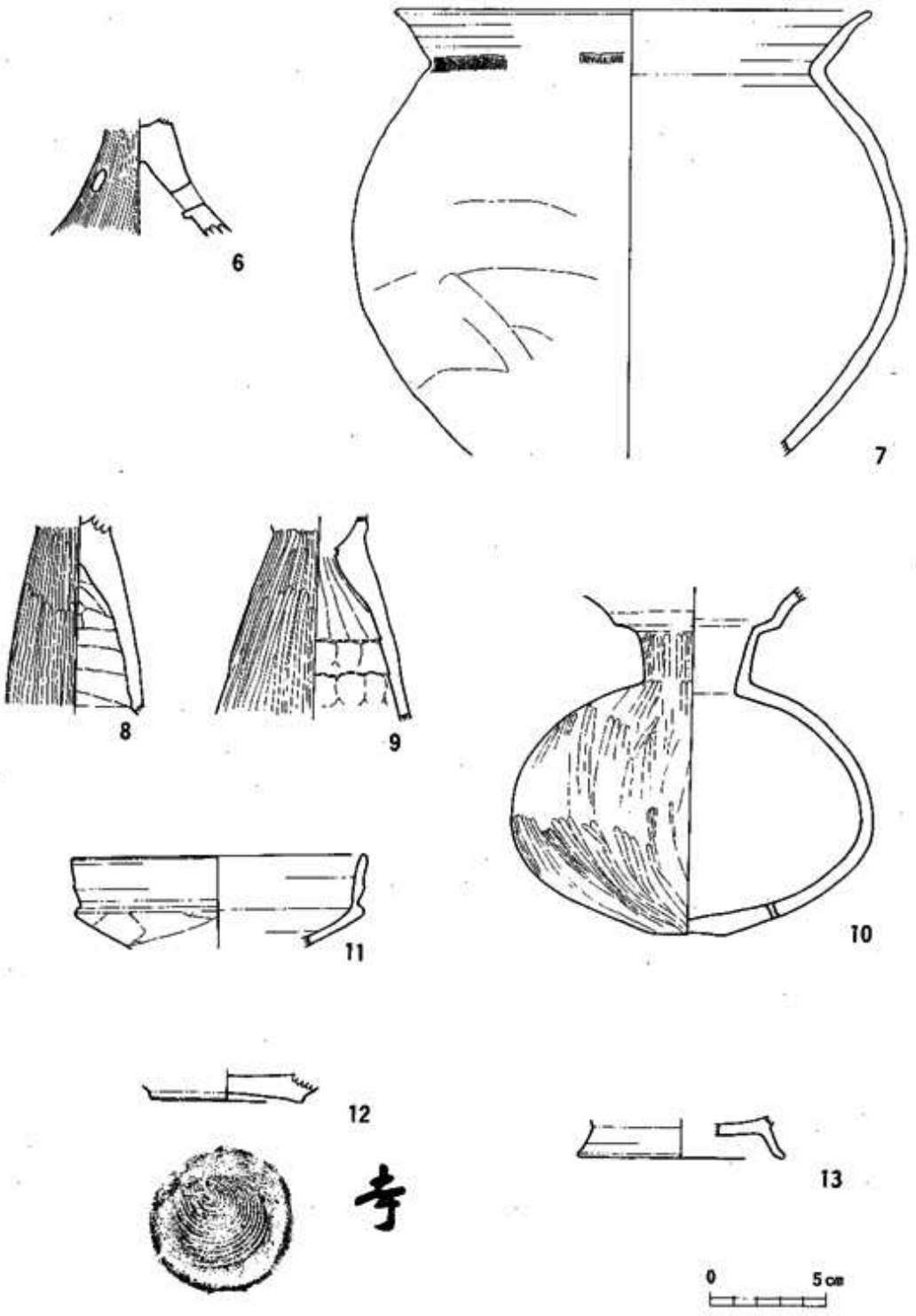


第14図　縄文時代の遺物

第15図　弥生時代の遺物(1/3)



第16図　グリッド出土の土師器(1)（1/3）



第17図　グリッド出土の土師器(2) (1/3)

法量（　）内は推定値

番号	器形部位	法量(cm)	器形の特徴	整形の特徴	胎土	焼成色調	備考
6	器台脚部	現存高－5.1	「ハ」の形に開く脚部である。器厚は厚く、脚部中位に3ケ所、穿孔される。外側からの穿孔である。脚部上端には器受部との接合面	整形は不明であるが、外面全体を縦方向のミガキによる調整を行う	石英等の細砂粒を混入	普通 淡黄褐色	F6グリッド周辺表採耕作中に出土したと言う。
7	甕	口径－20.6 最大径－23.9 現存高－19.3	底部は欠損。胴部の最大径は中位よりやや上位にある。頸部で屈曲し、口縁は外傾し、口唇で外反する。	胴部にはヘラ削り整形後、頸部のみに部分的に刷毛目により整形がみられる。口縁は内外面とも横ナデによる整形。	石英等の砂粒を混入	普通 黄褐色	C5－13グリッド出土沖積地近くのグリッドであり、6層からの出土
8	高坏脚	現存高－8.6	脚部は細身であり、下端には外側に屈曲する部分が遺存しており、大きく開くことが予想される。上端には坏部の接合面である凹みが残る。	外面はヘラ削り整形後縦位のミガキによる調整が行なわれる。内面は指頭による整形痕があり、上半は縦、下半は横方向に行なわれる。下端内側にわずかに横ナデによる整形。	砂粒を多く混入	普通 褐色	D3－11グリッド出土
9	高坏脚	現存高－8.9	脚部の膨みは大きい。上端には坏部との接合部の凹みが残る。下端には屈曲する部分がわずかにみられる。	整形痕は不鮮明である整形後ミガキによる調整。内面は上半に指頭による縦位の整形、下半に指頭の圧痕がある。輪積痕が明瞭に残る。	石英等の砂粒を混入	普通 褐色	G3－3、16グリッド出土
10	壺	口径－不明 胴部最大径 －15.5 現存高－14.6	胴部は小さな底部より、大きく張り出し最大径を中位よりやや下にもつ。頸部で収束し、屈曲直立する。口縁は有段口縁であり、大きく外反する。口唇部は欠損。	胴部は不鮮明ではあるが、横方向のヘラ削り後、縦方向のミガキによる調整を丹念に行う。頸部にも同様のミガキ調整。口縁部には横位のミガキ調整を行う。また口縁内面にも横位のミガキ調整、胴内部はヘラナデにより丹念に整形される。	細砂粒の混入。胎土は緻密	良好 褐色	F5－16グリッド検出の住居址覆土中からの出土。 胴部下端、底部近くに両側より焼成前の穿孔がある。
11	坏	口径－(12) 現存高－3.5	底部欠損、大きく開いた底部から稜をもってやや外反気味の直立する口縁部をもつ。	底部にはヘラ削りにより整形、口縁部は横ナデ。底部と口縁の境いに竹管状工具で回線。	砂粒を混入	普通 黒褐色	G3－1グリッド出土
12	皿底部	底径－6.4 現存高－1.2	底部のみ遺存、体部への開き方から皿と判断される。	底部は回転糸切りにより切り離し、外縁部を回転ヘラ削り。体部はナデ、皿の内面は一方向のミガキ調整。	細砂粒を混入	普通 淡黄褐色	C5－14グリッド出土底部に「寺」の墨書
13	高台部	底径－9	高台部は器厚が薄く、1cm程の高さで開く。端部では外反している。付け高台。	体部及び高台ともにナデによる整形。体部の切り離しは明瞭ではないが回転糸切り後、外縁部を回転ヘラ削り。	細砂粒を混入	普通 淡黄褐色	G6－9グリッド出土

第Ⅳ章　小　　結

高津新山遺跡の昭和58年度（第３次）の確認調査の概要については、以上述べてきたとおりである。グリッド発掘によって、広い調査対象地の全体の把握を目的としたものであったが、遺構の確認についてはなお不充分ではなかったかと考えている。しかしながら竪穴住居址15軒、土壙36基、溝状遺構３条を検出したことに、確認調査のある程度の成果を得たと考えたい。

出土した遺物からみると、縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代にわたって本遺跡が形成されたことを示し、遺構からみると平安時代の集落址が主体を占めているが、検出住居址の減少から、集落址の北西限へ近づいたと考えられる。今回の確認調査では、弥生時代及び古墳時代前半の資料が新たに得られた一方、試掘を殆んど実施しなかったためと思われるが、先土器時代の遺物は認められなかった。

縄文時代の遺物は昭和56、57年度確認調査に比しても乏しく、また遺構の所在も明瞭にし得なかった。加曽利Ｅ式土器を主体とするが、石器も石鏃２点と全体的に乏しく、包含層も消失している。

弥生時代の遺物の出土は、本遺跡の新たな知見である。遺構などは不明であるが、若干の出土としても、今後本遺跡を考究するうえで貴重な資料となろう。

古墳時代前期の資料も、今回の確認調査で新たに加えられた。土壙及びその覆土内出土の土器であるが、台地平坦部縁辺に所在し、この傾向より、縁辺部の精査が必要となろう。

平安時代については２軒の住居址を調査したが、他に確認された住居址の殆んどは本期に属すると考えられる。第05号住居址は平安時代の所産としては規模がやや大型となるが、集落址内での様相がどうなるのか、本調査の結果をまちたい。また第06号住居址においてはカマドの煙道部が長く、本遺跡で調査した５例のうち、特異なものとなる。

また「寺」の墨書坏が出土したが、市内には布目瓦などを認める遺跡や寺院址は確認されておらず、この墨書銘が寺院と関係のあるものかどうか、今後本調査の中で究明してゆく必要があろう。

なお、中世以降の遺構については、今回の確認調査では検出されなかった。

以上、第３次調査の概要についてまとめてきたが、基本的には奈良、平安時代の集落址として形成されたと把えられる本遺跡は、先土器時代、縄文時代、弥生時代、中近世にわたって人間の営為の所産として遺されたものであったと言えよう。

第Ⅴ章　発掘調査のまとめ

調査の概要

高津新山遺跡は約120,000㎡にわたって把えられ、土師器の散布地として確認されていた。しかし該地の大半に土地区画整理事業等が計画され、昭和56年度より３ケ年にわたって、断続的に確認調査が実施された。これは未だ表面観察にとどまっていた遺跡の把握を、試掘することによって規模や性格の手懸りを得、保存策を講じる資料を探ることを目的としたものである。そして国庫補助金、県費補助金を得て、全対象面積96,800㎡に対し、調査面積15,309㎡（15.8%）を実施したわけである。

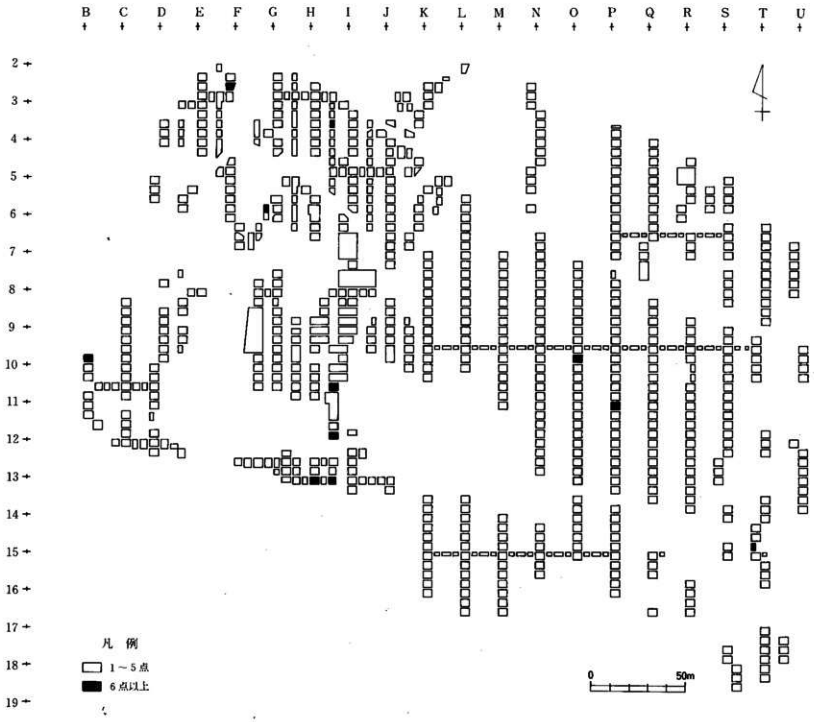
この結果、奈良・平安時代の集落址を主体として、先土器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代・奈良・平安時代、中・近世にわたって営まれた遺跡であることが把えられた。検出遺構は竪穴住居址59軒、土壙198基、溝状遺構48条、掘立柱穴群５基、地下式横穴２基などが確認された。この他に鞴片や鉄滓なども出土しており、多様な性格を有する遺跡であることが把えられた。

昭和56年度確認調査（第１次）　調査対象となる台地の東半、Ｋ列以東を第１次確認調査地とし、対象面積50,000㎡に対し、試掘面積は8,180㎡（16.3%）であった。住居址34軒、土壙92基、掘立柱穴列５基、溝状遺構18条、地下式横穴１基を検出し、住居址２基を調査した。また覆土に貝層を有する住居址、土壙を確認し、集落址としては台地内に入り込む浅い谷津を囲んでいる傾向を示していた。この確認調査ではじめて本遺跡の具体的資料が得られ、その一端が示された。

昭和57年度確認調査（第２次）　試掘対象地は台地南西部とし、南北は７列以南、東西はＫ列以西を第２次確認調査地とした。対象面積26,800㎡に対し、試掘面積は3,779㎡（14.1%）であった。住居址10軒、土壙70基、溝状遺構27条、地下式横穴１基を検出し、うち住居址１軒、地下式横穴１基について調査を実施した。この結果、集落址は台地の終わりとともに南西限に達する傾向を示したが、鉄滓・鞴片の出土も認められ、標高の低い地区に製鉄遺構の所在を想定されることとなった。

昭和58年度確認調査（第３次）　試掘対象地は台地の北西部、南北７列以北、東西Ｋ列以西として実施した。対象面積は20,000㎡で、試掘面積は3,350㎡（16.75%）であった。住居址15軒、土壙36基などが検出され、うち住居址２軒を調査した。この結果、集落址は北西限の一端を把えることができ、新たに弥生時代、古墳時代の前期の資料が加わった。

以上が３次にわたる確認調査の概略であるが、本格的調査が実施される場合、集落址の調査を主体として、先土器時代・縄文時代の晩期の精査が必要と考える。また次に各時代の概要について記し、今後の本遺跡調査の参考としたい。



第18図　縄文式土器グリッド出土状況図(1/2000)

1．先土器時代

本期に係る試掘は殆んど実施できず、3次にわたってもわずかに5グリッドを、ハードローム上面まで下げたにすぎない。これは遺構のかかるグリッドが多かったためでもあるが、時間的余裕もなかったことによる。しかし本期に属す石器、剥片等の出土は、ローム層中に包蔵される可能性が極めて高いことを示していると言えよう。

出土した遺物はナイフ形石器1点、ポイント3点、スクレーパー1点、フレイク等があり、石材としては安山岩、頁岩、チャート、黒曜石などであった。石器と石材の関係については、遺物の量が少ないためなお不明であるが、現状ではまとまりはもっていない。ただ今のところ、黒曜石の石器は認められない。

第1次調査及び第2次調査で報告した資料は、殆んどが表土耕作土及び表面採集で得られたものであった。また形態などからみると、いくつかの文化層が考えられる。

2．縄文時代

本期に属する遺構は、3次にわたる確認調査では明らかにし得なかった。主として本期は、土器・石器等の確認による把握であり、本遺跡の形成主体とはなり得ないのではなかろうか。

遺構としてはなお疑問であるが、晩期の出土したS7区周辺、S7－2グリッドに、その想定をしえようか。第1次調査で確認したものであるが、大洞A・A′式に対応する土器の出土地点周辺には、粘土等が若干散布しているところが確認されている。明瞭な落ち込みや、基本土層との識別が困難なことから、確認調査では遺構として扱っていないが、本格的調査では精査の要があろう。また、土壙のなかに本期のものがあるかも知れないが、確認面での時期把握は不明である。

土器片は前期・中期・後期・晩期に、断続的にわたっているが、量的には少ない。中期加曽利E式がその中でも主体を占めるが、特に中期と晩期に分布の差がみられる。

前期の土器は、黒浜式、浮島・興津系に属するものが確認されている。いずれも表土耕作土層の出土で、量的にもさほど多くないが、さして出土地点がまとまると言った傾向は示していない。

中期の土器は初頭の時期、阿玉台式、加曽利E式にわかれるが、阿玉台式を含めて前半に属するものは希れであった。出土地点の傾向を指摘できるほどのものではなく、前半期の資料は乏しい。加曽利E式についてはEⅠ式よりEⅢ式まで認められるが、EⅡ式が主であり、比較的まとまった資料である。その出土は台地の中央部に入る浅い谷津を埋める土層中及び、第04号住居址周辺に分布傾向を持っている。しかし第04号住居址周辺では、表土層の下がハードロームとなるなど、削平されており、包含層の存在は失われていると言えよう。

後期の土器は加曽利B式、安行Ⅰ・Ⅱ式が認められるが、前半の土器は今のところ知られない。出土も希れであり、傾向を示差することもできない。

晩期の土器は先述したように、Ｓ７区周辺に出土主体を有する。Ｓ５区より入り込む浅い谷津に対し、Ｓ７区周辺に黒色土層が第２層として３～５cmが認められ、これが包蔵する。この周辺の調査は第１次において行われたが、後半のものが主体であった。

石器は石鏃５点、打製石斧１点、礫器１点、磨石１点などが出土し、その他に黒曜石、メノウ、石英などの剥片、砕片が認められる。石器と石材の関係は先土器時代と同様、その量的乏しさから早断はできかねるが、黒曜石製の石器は今のところ出土していない。また石鏃は５点ともチャートであり、砂岩を使うものとしては磨石と礫器がある。出土層は表土耕作土層であり、その時期や文化層は把えられず、いずれも単独の出土であった。

３．弥生時代

本期に属するものは、第３次調査においてはじめて出土したにすぎない。量的にも極めて希れであり、本遺跡の主体を占め得ない。しかし台地縁辺、谷津に下るあたりで出土したため、今後谷津に接する周辺の精査が望まれる。後期前半の遺跡は、本遺跡の周辺には確認されておらず、千葉県文化財センターが調査を実施中の萱田遺跡群にまで遠方となる。このため本遺跡内で、どの様な位置を占めるかは、遺構調査がはじまる中で明らかにしたい。

４．古墳時代

本期に属する遺構、遺物は、量的に乏しく、本遺跡の形成主体とはなり得ないと思われる。遺構は土壙１基が確認されたのみ（第３次）で、住居址については未掘のため、所在するかどうか不明である。３次にわたる確認調査では、出土地点が若干偏在し、生活地点（？）の分布が認められるが、本調査においては遺構との関連を考えねばなるまい。

出土した遺物から見ると、五領式と鬼高式に分けられる。前者は第３次調査で検出された土壙及びその遺物であり、台地上北西部のＧ５－３グリッドの所在であった。後者は第１次調査で散見できたが、Ｔ17区周辺が主であった。鬼高式土器については小破片が多く、図示できなかった経緯があるが、遺構も不明であり、土器が出土しているだけであった。

５．奈良・平安時代

本遺跡の形成主体の時期であり、出土土師器・須恵器などをみると、平安時代にその主体をおくようである。竪穴住居址のその殆んどは本期の所産であり、確認調査の成果であったと思う。

第１次２軒（第01号住居址、第02号住居址）、第２次１軒（第04号住居址）、第３次２軒（第05号住居址、第06号住居址）の計５軒についてそれぞれ遺構の調査を実施したが、規模などにまとまりが見られず、住居址間の検討は本調査にまちたい。集落址としては、Ｓ５区あたりより南

下し、J13区あたりに西進して入る浅い谷津を（現状では耕作土が埋没し、平坦に見える）とり囲むように展開している。またR列あたり、谷津の東側では住居址の存在は薄くなっている。住居址が展開する標高は14～20mで、その占地は意識されていないようであるが、14mに位置し、しかも台地の先端で検出された第01号住居址は区別されるかも知れない。

出土遺物としては、土師器・須恵器の甕、甑、坏、皿などで、鉄製品としては刀子、紡垂車などがみられる。第04、05号住居址の出土が主であったが、遺構確認面での出土もある。坏の底部をみると、回転糸切り後に底縁をヘラ削り調整を行うものが多い。現状では切り放しのみは少なく、調査例の扁在と思われる。

墨書土器・ヘラ描き土器は、住居址出土例を中心に、様々な例がみられる。判読不明（小破片のため）のものが多いが、中・寺などの墨書例がある。寺の場合は市内に古代寺院址が想定される遺跡がなく、また市外においても周辺に所在の想定されるところがないなど、本来の寺院に係るものか判断しかねる。下総国分寺、上総国分寺など古代寺院周辺には、「寺」の墨書例が多いが、近隣に所在しない場合、集落内での関連であるのか、墨書土器の本遺跡内の増加をみて判断したい。ヘラ描き土器は「堤」と「キ」であり、いずれも土師器の坏に記されたものである。堤は第1次調査で出土したもので、土器の底部及び内底面に、焼成後描かれたものであった。K15－1グリッドに係る住居址の、確認作業の中での出土であった。また「キ」は第04号住居址の出土で、8点が認められる。これも焼成後にヘラ描きされたもので、意味は不明である。

鉄製品は第04、05号住居址より、刀子を主として出土しており、遺存は不良なものが多い。また土製品としては紡垂車や管状土錘がみられるが、今のところ量的には少ない。

この他に本期の遺構、遺物について確認されたもののうち、特記しておかねばならないのは、第03号住居址と隣接する土壙である。この住居址は第1次調査で確認されたが、台地中央部のD7－4グリッドで検出した。一部耕作による攪乱をうけているが、遺存は良好のようであった。未調査のため表面観察だけの結果であるが、ハマグリなどの鹹水系の貝層が見られる（隣接の土壙も同様である）。八千代市では東京湾に注ぐ水系がないため、この鹹水系貝層が、交易によると思われる手段で入ったと考えられる。しかしその他の地点では貝層が確認できず、第03号住居址が特例であるかは不明な点として残っている。

以上、本期について概要を述べたが、時間幅もあり、遺構によって様相が違うなど、特徴的な遺跡であると考える。

鞴・鉄滓について

第2次調査において出土した鞴片と鉄滓については、引き続き第3次調査時に留意して確認作業を実施したが、遺物及び製鉄遺構に類するものは検出されなかった。B8区を主体に出土した

鉄滓は、鞴片とともに、その遺構を想定させるに充分であったため、第２次調査区域に関連するものがあろうかと思える。

鞴片は３個体ほど出土し、推定口径は10mmを越えるものがある。第04号住居址覆土中層の鉄滓出土も認められ、時期的には平安時代頃と思われるが、鞴・鉄滓については分析が未了のため本調査後の成果にまちたい。

地形的にはＥ７～Ｅ10区にかけ、台地が急傾斜となっているあたりの精査が必要と認められる。

６．中・近世について

本期に属する遺構は地下式横穴が２基検出され、うち１基を調査した。第１次において天井が崩壊したものが検出され、第２次では先土器時代の確認作業中に天井が崩れた時点で検出したものである。調査を実施したものは第２次であり、壙内は空洞であるため、危険防止を含めて先行調査した。

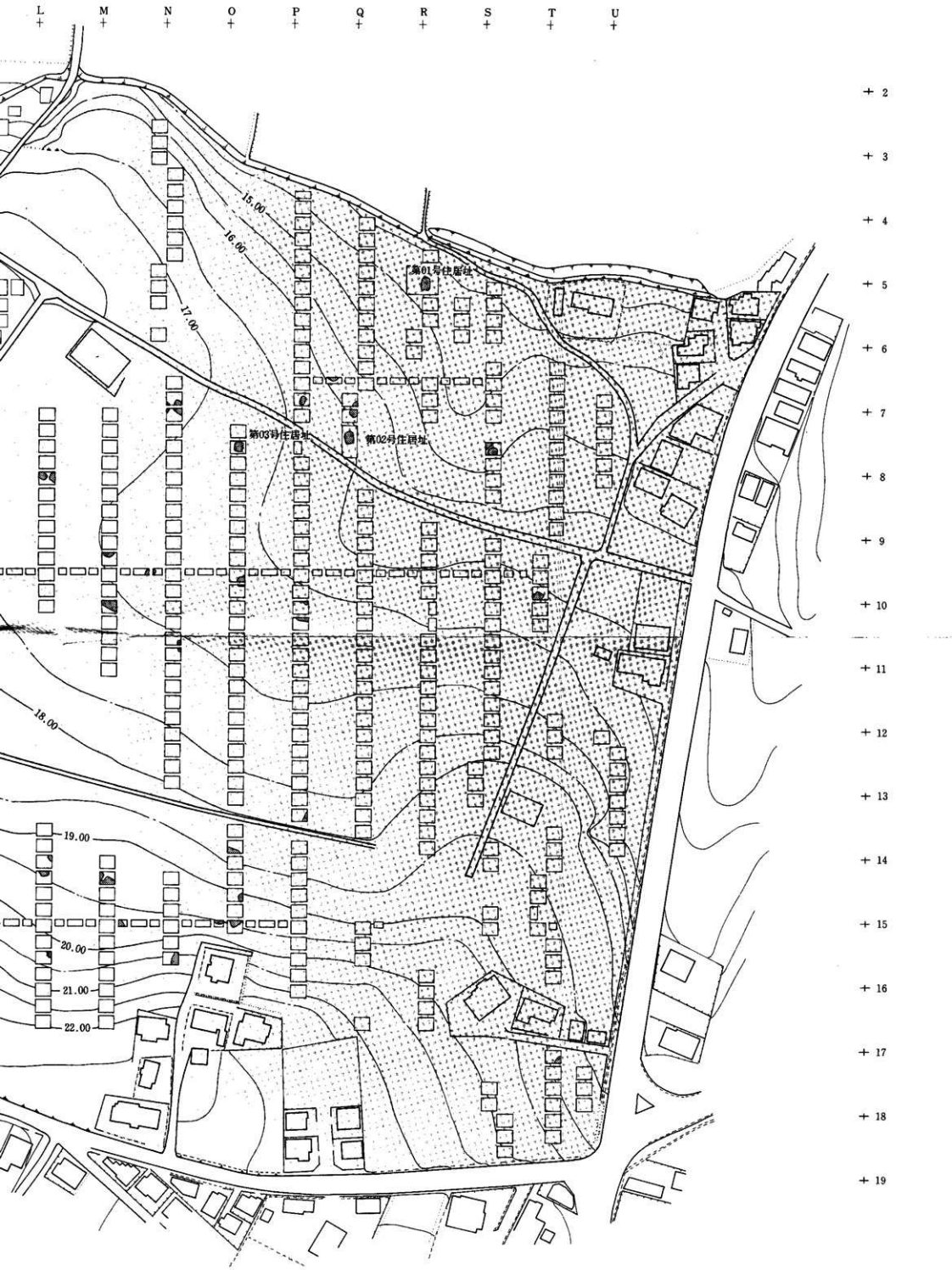
地下式横穴については、地主等の話を聞くと他にも所在するとのことで、台地西側Ｆ・Ｇ・Ｈの７～12区に未確認のものがあると思える。本市内では地下式横穴が検出される遺跡としては、吉橋城跡脇の渋内遺跡や正覚院館跡脇などに所在する。本遺跡も西側の谷津をはさんで高津館跡が所在するため、この関連遺構であろうか。

遺物としては陶磁器が主体であるが、その殆んどは明治以降である。中世としては常滑片などで、江戸時代の遺物としてはホウロク・寛永通宝などであった。陶磁器は全て破片で、容量などはうかがえない。

本期は地下式遺構等はともかく、遺物については耕作による施肥と共に廃棄されたと思われ、関連する遺構は所在しないと思われる。

以上、３次にわたる確認調査の全体の概要を述べてきたが、第１次及び第２次調査については、それぞれの概報を参照されたい。

図　　版


L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
15.00
16.00
17.00
18.00
19.00
20.00
21.00
22.00
第01号住居址
第02号住居址
第03号住居址

1	5	9	13
2	6	10	14
3	7	11	15
4	8	12	16

第1図　高津新山遺跡の地形測量図及び遺構検出グリッド分布図(1/1000)